

「上からの革命」について

那 須 宏

はじめに

開国後のわが国近代政治史は、ヨーロッパの有力な資本主義諸国に例をみない特異な性格をおびている。維新の変革によって幕藩体制を打倒し成立した天皇制統一国家は、その後、維新変革を上回るあるいはそれに匹敵する変革をついに経験することなく、第2次大戦の敗戦の日まで存立しつづけた。そして、このことが、日本近代全体にたいする首尾一貫した理解を困難にしてきた。

『日本資本主義発達史講座』(1932~33年)以来、維新変革の本質を絶対主義の成立とみる見解は、日本近代全体の理解のためには、たんに「首」にあたるものであり、「尾」を把握すること、すなわち、維新変革に匹敵するほどの変革もなしに、絶対主義天皇制がいついかにして帝国主義国家の権力に、独占資本主義段階の権力に転換しえたのか、またいかにして国際的なファッション勢力の有力な一翼として、国民を戦争に動員することに一応成功した権力になりえたのか、などについての説得力ある説明にはなお成功していない。維新ブルジョア革命論は、日本近代全体についてのより包括的な理解の方法として提起されたのであるが、これには、「尾」を説明しえても、「首」を説明できないという逆の意味の難点がある。すなわち、経済史的にはマニユファクチュア段階以前の維新変革をブルジョア革命と規定することによって、「ブルジョアアジー抜きブルジョア革命」という矛盾した結論に導く。

4 「上からの革命」について

かくて日本近代全体の首尾一貫した包括的な理解は、絶対主義天皇制の性格が成立当初のまままで敗戦の日までつづいたのではなく、いずれかの時期になんらかの方法で性格が転換したと考えることによってはじめて可能になる。このような天皇制の性格転換を解明することは、むしろ維新変革の解明以上に、日本近代政治史上の重要な理論的課題であるといえよう。かつて井上清教授は、維新ブルジョア革命論にたいする批判の結びとして、つぎのように書かれたことがある。

「私はやはり明治政府は絶対王政と考えるが、この説にとって真に困難なことは、明治初年の史実の整合的な説明をすることにあるのではなく、資本主義が高度に発展したばあいの天皇制はどうなるのか、封建制から資本制への過渡は終って、資本主義が支配的になったときにもなお、それは絶対主義なのか、もしそれを絶対主義というのなら、それは絶対主義を過渡期の社会の権力形態であるとする完成とはちがった完成をしなければならない。またもし絶対主義でなくなるとすれば、それは何らかのブルジョア権力にちがいないが革命なしにそういうことが可能であったのか、あるいはそれはどんな微温的でもとにかく革命が明治以後の歴史のどこかの時点にあったことを実証するのか、いずれかでなければならない。これは絶対主義という概念をどういじくるかではなくて、つまり日本近代史における政治と経済を総合的に統一的に理解する方法論をつくりあげねばならぬということである。⁽¹⁾」

維新変革の本質およびそれによって創出された権力の性格を解明することは、それ自体重要な研究課題ではあるが、従来の明治政治史の研究は、あまりにも維新史あるいは自由民権運動史に集中し、「真に困難なこと」の解明がおろそかにされてきた。そのことが、「尾」の把握を困難にしてきたように思う。ところで、絶対主義天皇制の性格転換を明らかにするカギは何であろうか。それは「上からのブルジョア革命」という概念にある、と考える。しかし、従来のわが国の研究においては、天皇制の性格転換を明らかにすることの重要性をかならずしも十分に理解していなかったこと、また「上から

のブルジョア革命」という概念の検討に乏しかったことのために、天皇制の性格転換にかんする論議はかなり粗雑なものであった。たとえば、「地主・ブルジョアの天皇制」とか「ブルジョア・地主的天皇制」というあいまいな表現が、国家の階級的な性格を規定するに必要な理論的実証的検討なしに、怪しまれることなく通用していたのである。

本稿の課題は、「上からのブルジョア革命」という概念を、その提起者の所説にかえり、古典的文献の検討をつうじて明らかにすることにある。古典的文献を検討するなかで、ドイツやロシアの政治史にふれていくが、それは、そのこと自体が目的ではなくて、日本近代政治史の研究、とくに帝国主義移行期における天皇制の階級的な性格の転換を解明するための必須の理論的準備であり、そうしてはじめて日本近代全体の包括的な理解が可能になると考えるからである。

註 (1) 歴史学研究会編『明治維新研究史講座』第4巻、平凡社、1959年、33ページ。

1 後進国絶対主義の特質と矛盾

後進国絶対主義の特質は、基本的に、資本主義が一個の世界体制となったのちに成立し、または存立しつづけるので、資本主義世界体制のなかで自己を維持するため、上からの資本主義化・自国の大工業化をみずから推進せざるをえない、という点にある。

生産物の商品への発展が、相異なる諸共同体間の交換にはじまるのと同様に、資本主義の成立にとって、歴史的に世界市場の存在が国内市場の形成に先行する。商品・貨幣および資本は内在的論理的に世界人的性格をそなえ、資本主義は一個の世界体制として存在する。もちろんこのことは、資本主義が国内市場を基礎にし、生産関係の集中的表現である国家を支柱にして、一国資本主義（国民経済）として結集し、各国資本主義が相互に対抗するものとして結合していることを否定するものではない。資本主義の発達はいくつ

国民経済の自足性をいちじるしく減損し、世界経済の一環たらしめるが、現実には、資本主義世界体制が成立するためには、各国において資本制生産が支配的となり、世界市場めあての商品生産が決定的となる必要がある。かかる条件は産業革命によってうみだされる。機械制大工業は、競争を普遍化し、あらゆる国々の生産と消費を全世界的なものにし、個々の国々の自然生的排他性を止揚して、世界市場を飛躍的に拡大する。資本主義は未開拓の諸地域、新たな国々をその渦中にひきこみ、孤立して存在する各国市場を世界市場に結合する。このような世界市場の統一、世界経済への各国民経済の統合を基礎にして、資本主義世界体制が形成されるのである。

こうして、資本主義が一個の世界体制となり、各国がその運動のなかにひきこまれたのちには、外的要因はたんに国際的条件または契機として存在するのではない。外的要因は、一定の条件のもとで内的要因に転化する⁽¹⁾。ここでは、国家形態の差異や関税障壁は、もはや各国のふり孤立性と封鎖性を維持する防壁とはなりえない。後進国の絶対主義は、資本主義世界体制のなかで自己の存立を維持するため、上から資本主義の発展を促進せざるをえない。なぜなら、絶対主義は、一般的に、内に向かっては国家的統一、外に向かっては国家的独立としてあらわれ、そこに自己の存在理由を誇示するものだからである。そして、政治的統一・独立は、経済的統一・独立に裏うちされてのみ、すなわち、自国の産業によって国内市場を統一してはじめて強固なものとなる。かくて世界市場のなかで自国の経済的独立を確保することが、ブルジョアジーにとってのみならず絶対主義にとっても、政治的使命となるのである。ここに、後進国絶対主義の特質、それが内包する矛盾の特殊性と大きさ、これらいっさいの根因がある。

マルクスは、『道徳的批判と批判的道徳』のなかで、「ドイツでは、絶対君主制がおくれて形成され、より長く存続していることは、ドイツ市民階級の奇型的発展過程からだけ説明される。この発展過程の謎は、商工業の歴史のうちに解かれている」と書き、これらを規定した事情として、「一般に世

世界市場でのドイツの圧迫された地位、それによって外国人から諸侯に支払われた補助金が国民所得の主要な源泉となり、そこから生じる市民の宮廷への依存⁽²⁾をあげている。このことは、ドイツのみならず他の後進絶対主義国にもあてはまる。

おくれで登場しより長く存続する後進国の絶対主義が、世界市場にひきこまれると、一挙に、その構造的矛盾すなわち半封建的土地所有を基盤とした専制支配の脆弱性を露呈する。こうした条件のもとで旧来の支配を維持するただひとつの道は、できるだけはやく資本主義的工業に移行することである。自国の政治的独立を維持し、また、すでに成長しつつあるブルジョアジーに新たな支配力を与えないように国内を統一するため、絶対主義は、みずから鉄道を敷設し、近代的軍備をととのえ、金融制度を整備しなければならない。だが、鉄道網の拡張は、線路・機関車・車輛等を供給する国内工業がなければ、これを達成することはできない。大工業の組織全体を輸入せずに、その1部門だけをとりいれることはできない。かくて短時日のあいだに、鉄道や工場が発展し、銀行が拡充され、資本主義的生産の基礎がさずかれる。しかし、それとともに、封建的農業の根幹に斧がむけられるのである。⁽³⁾

もともと鉄道の建設は、資本主義的工業による封建的農業の侵蝕を意味する。最僻地の農産物も世界市場に直接つながるようになり、それとともに、大工業製品が国の隅々に侵入してきて、手工業を破滅させ、封建的諸関係を震撼させる。鉄道は社会のブルジョア化の動脈である。機械が輸入され、工業製品の価格が急速度に低落すると、まず最初にマニュファクチュアがたおれ、つぎに徐々にふるい家内工業までが破滅していった。「マニュファクチュア地方の全住民は、彼らの伝来の生計の道を奪われた。従来の町人的市民のうちから大ブルジョアが成長し、……数百人の労働者を使役するにいたった。賦役農夫はふるい工業の没落によってふるい儲けぐちを失い、新しい工業によって新しい欲求物品を与えられた。封建的な農業経営は、もはや近代的工業と並立しては不可能になった。賦役農業の分解が必要となった。農民

の地主にたいする封建的身分は維持しがたくなった。……社会のあらゆる階級の身分がすっかり変わってしまった。ふるい諸階級はますます後景にしりぞき、ブルジョアジーとプロレタリアートの2つの新階級が表面に現われてきた。農業は工業にたいして重要性を失い、農村は都会に優位を譲った。⁽⁴⁾これら機械のもたらした結果は、その作用を全国に及ぼし、やがて絶対主義の基礎をほりくずしていく。

このように、後進絶対主義国における資本主義的工業の発展は、国内的条件の成熟をまつことなく、国際的条件(外圧への対抗)を初発の契機として推進されたのである。そして、そのことが、後進国ブルジョアジーの性格を特徴づけるのである。後進国に向けられた先進国の「重砲」たる安価な商品に対抗するため、さらにすすんで世界市場における圧迫された地位をはねかえすため、資本主義的工業の発展は、世界的な水準でおこなわなければならない。しかし、国内では、農村の衰退のため国民的工業は未成熟な状態にあり、また、商業の未発達のため封建的諸身分の貨幣蓄積もきわめて貧弱であった。そこで、絶対主義国家権力によって創出された資金によって、機械制大工業の移植がすすめられる。ここでは、ブルジョアジーが絶対主義国家によって哺育される。「ヨーロッパとは違ってわが国では国家がブルジョアジーの創造物ではなくて、反対にブルジョアジーが国家によって創られているのだ⁽⁵⁾」といわれる所以である。ブルジョアジーのこの奇型的な発展過程は、彼らの政治的性格を特徴づける。ブルジョアジーは政治的支配にたいして臆病になり、革命的手段による絶対君主制の打倒を完成できない。「彼らは下層民が革命では大胆となり、手をだすことを知っている。したがってブルジョア諸公は、できるだけ革命なしに、穏便な方法で絶対王制をブルジョア王制にかえようとするのである。⁽⁶⁾」

しかしながら、絶対王制は穏便にしりぞくわけにいかない。「この絶対君主制は、その支配的地位を、ブルジョアジーに奉仕する地位ととりかえようとは、けっして望まない。……明らかに、絶対君主は、ブルジョアジーの卑

屈な恭順さにもかかわらず、自己の眞の利害がこれらの身分（封建的諸身分—那須）のそれといっしょであると認めている。⁽⁷⁾ 絶対君主制は、自己の基盤たる封建的諸関係の維持につとめる。その結果、国内における資本の蓄積源が限界づけられ、大工業化が阻害される。後進国の絶対主義は、世界市場のなかで存続していくため、上から資本主義的工業を發展させながら、他方では、資本主義的工業の發展が国内の封建的諸関係を侵蝕するのを極力阻止しなければならない、という矛盾に直面する。そこで絶対主義は、大工業化のための蓄積源獲得の途を、生産と搾取の内包的發展にもとめるよりも、外延的拡張にもとめる。対外膨脹は、国内の矛盾のはげ口としてばかりでなく、世界市場での圧迫された地位をはねかえす途としても追求される。かくてたえざる対外侵略が後進国絶対主義の生存条件となり、ブルジョアジーはそこに自己の發展の途を見出すのである。

ところが、絶対主義は、かかる政策のためにたえず金を必要とした。そこで、これを国内でまかなうべく、経済的支配力を強化しつつあるブルジョアジーに依存するようになる。さらに、自国のブルジョアジーだけでなく、外国の金融資本にも依存し従属せざるをえなくなる。そして、その内外政策の強行をやめるわけにいかない以上、財政状態はますます悪化する。国家はかぎりなく債務を負い、外国における信用は地に落ちて、国庫の直接の利益は国内工業の育成にかかってくる。外国に負っている債務の利子を支払うため、自国の原料品の輸出を外国の工業製品の輸入よりも超過させねばならない。そして、この輸出超過の額を増大させるため、自国の工業を急速に發展させて、国内需要の全部をみたすようにしなければならない。かくて外国から経済的に独立し、自給自足の工業国にならねばならぬという要求がおこり、さらに、自国の資本主義的發展を数年間でその絶頂にたかめようとする、政府の痙攣的努力がおこるのである。⁽⁸⁾ なぜなら、それなしには、国庫は破産し、絶対主義は政策的に行きづまるばかりでなく、自己の存立そのものに致命的打撃をうけるからである。この過程で絶対主義は、あらゆる経済問題でます

まずブルジョアジーの影響下におちいり、彼らの経済的利益によって左右されるようになる。絶対主義は、ブルジョアジーの政治的支配への要求をしりぞけながらも、彼らの経済的利益を代表せざるをえなくなる。なぜなら、それなしには、絶対主義はその政策を推進できないからである。

他方、ブルジョアジーは、絶対主義によって自己の経済的利益が代表されるようになると、現実の政治権力をすべて絶対君主の士官—官僚閥にゆだね、専制権力の存続に協力する。彼らは、自己の完全な政治的支配を断念することによって、その経済的支配をあがなう。しかし、ブルジョアジーが絶対君主や官吏の専制的独裁政治をなお放置しているとしても、それはただ、この専制的独裁政治が官吏の買収によって緩和されているばかりでなく、ブルジョア自由主義的な意味においてはあるが、国内の事情からみて結果のわからぬ変革をおこしたりするよりも、かえって多くの保証を彼らにわたらせるにほかならない。彼らは、王権から、政治権力を「少しずつ買いとる」か、あるいは「値切り買い」⁽⁹⁾することで、自己の政治的支配への要求を満足させるのである。

たしかに、絶対主義がブルジョアジーの経済的利益を代表しはじめたことは、国家の階級性格における重要な変化を意味するものではあるが、事態がそこにとどまるならば、先進国の古典的絶対主義とのあいだにまだ本質的な差異を見出すことはできない。政府の諸政策の階級性格と政治全体の階級性格とは、さしあたっては別のことであり、国家の階級の本質を決定するものは、その経済的・社会的機能ではなく、政治的・抑圧的機能つまりいかなる階級関係を維持していくかということにある。経済的機能は、政治的機能の根底をなしているものである。したがって、問題は、国家の経済的機能の変化が政治的機能の変化にまで発展し、政治的支配形態の変化を惹起する点にもとめられる。また、絶対主義がブルジョアジーの経済的利益を代表しはじめたのは、外的要因に触発されてであったが、資本主義が一個の世界体制となり、各国がその一環となったのちには、外的要因は、たんなる外圧

または国際的条件にとどまるものではなく、一定の条件のもとで内的要因に転化し、一国の内部から作用するようになる。後進諸国が、西ヨーロッパの例にならって、資本主義的大工業国にならうとするならば、その農民の大部分をプロレタリアートに転化することなしには不可能である。そしてその場合、ひとたび資本主義経済の渦中に身を投じたならば、先進諸国と同様に、この制度の冷酷な法則に身をゆだねなければならなくなるのである。

この資本の本源的蓄積過程全体の基礎をなすものは、耕作者（＝農民）の収奪である。絶対主義が封建地代を主要な財源として大工業の育成をおこなうようになると、農民収奪はますます苛酷になり、広汎な農民闘争の爆発をみるようになる。その結果、封建的土地所有関係は維持しがたくなるばかりでなく、専制権力の存立自体をあやうくする危険物に転化する。絶対主義は、自らの基盤たる封建の大土地所有を、ブルジョアの・ユンカー的経営に転換せざるをえなくなる。こうして、絶対主義的専制政治（＝無制限の専制）の自然的基礎が徐々に変化しはじめる。

また、世界的水準における機械制大工業の輸入は、少数の独占が多数の小規模生産のうえに聳立するという矛盾に具象化される。それは、一方では、大量の小生産者を急速に没落させて絶対主義の社会的基礎を動揺させ、他方では、近代の工場のプロレタリアートをひとつの階級に形成するための条件を準備する。すなわち、大工業は、大量の賃金労働者を創出し、彼らをたがいに結びつけるばかりでなく、彼らの労働条件や生活状態を平準化し同質化する。個々の労働者と個々の資本家との衝突は、ますます2つの階級の衝突という性格をおびてくる。ブルジョアにたいするプロレタリアートの闘争は、地域的闘争から地方的闘争へ、さらにひとつの全国的闘争へと発展する。そのなかで、彼らは、階級意識の自覚にたっし、労働者政党を結成して国家権力との対決ならびに権力獲得の問題を提起するようになる。プロレタリアートは、自分の敵とたたかうと同時に、敵の敵すなわち絶対君主制や地主ともたたかう。そのときから、絶対主義は、農民叛乱の抑圧という本来の

機能にくわえて、労働者階級の反抗の抑圧という新たな機能をもはたさざるをえなくなる。つまり、本来封建的な権力である絶対主義が、資本主義的な権力、ブルジョア的な権力としても機能するようになる。また、ブルジョアに自己の政治権力を断念させ、絶対主義との協定をうけいれさせるにいたった根本の動機も、「政府にたいする恐怖ではなくて、プロレタリアートにたいする恐怖¹⁰⁾」なのである。

もちろん、「社会の経済的諸生活条件のこのような急激な変化に、社会の政治的組織のこれに対応する変化がすぐあとにつづいたわけではないが¹¹⁾」、資本主義的工業の発展は、階級闘争の新たな展開をうながし、政治的支配形態の変革を不可避にする。専制政治の自然的基礎が動揺し、国家の本質的機能が変化するにしたがって、絶対主義は、自己の政治形態を徐々に変革し、封建国家からブルジョア国家に移行しはじめる。それは、後進絶対主義国が資本主義世界体制のなかにひきこまれた結果、直面するにいたった特殊な矛盾を表現している。すなわち、後進国の絶対主義は、資本主義一般の発展法則の規定をうけて、政治と経済との一連の鋭くて激しい矛盾に直面し、自己の直接的対立物である政治支配のブルジョア的形態をうみだす。資本主義世界体制の側から促迫をうけて、自らが抱っていた封建的再生産構造のさまざまな内部矛盾をつつき出され、自らの支配を維持するため、資本主義的再生産構造を創出してそれに依拠しなければならなくなったのであるが、いまやそれによって自己改造をせまられるのである。

こうして、「ドイツに端を発した上からの革命の新時代がやってき、それと同時に全ヨーロッパ諸国における社会主義の急速な成長の時代がやってきた¹²⁾」のである。革命は、一般に、既存社会機構の根本的変革を意味し、とくに、政治的支配形態の根本的変革と経済構造の根本的変革との結合について用いられる。エンゲルスは、「真の革命は、一つの新しい階級を支配的地位につけ、この階級が自分の姿にのっとって社会を改造するのをゆるす点で、すべて社会革命である¹³⁾」と書いている。これにたいして、国家権力の階級間

移行なしに、旧権力が、自己の支配を維持するため、社会の経済構造と政治的支配形態の根本的変革をおこなうならば、それは「上からの革命」である。

後進国のブルジョア革命の過程では、自由主義的ブルジョアジーの指導する立憲君主主義的な道と、プロレタリアートが農民を指導してたたかう革命闘争の道とが、直接に対抗しあう。自由主義的ブルジョアジーは、合理的な譲歩を代償として旧権力と取引し、プロレタリアートと農民は、旧権力を打倒し旧勢力を一掃しようとする。したがって、「ブルジョア革命は、ブルジョアジーの指導のもとでは、未完成の革命（すなわち、厳密にいえば、革命ではなくて改革）でしかありえない。それは、プロレタリアートと農民の指導のもとではじめて、真の革命となることができるのである。⁽⁶⁵⁾」だから、「未完成のブルジョア革命」とは、たんに「多くの封建的残存物をあとに残し⁽⁶⁶⁾たブルジョア革命という意味ではない。それは、ブルジョアジーに指導された革命が、専制権力の反革命との妥協におわり、途中で挫折することを意味する。「すべての『未完成』（マルクスの表現）のブルジョア革命は富裕な農民が秩序のがわに移行したことで『終わった』⁽⁶⁷⁾」革命の2つの道の対抗は、農民層の中立化と労働者階級の孤立化・暴力的鎮圧によって終止符がうたれ、旧権力による「上からのブルジョア革命」が開始される。

絶対君主制は、プロレタリアートに指導される「下からの革命」を圧殺し、ブルジョアジーのうけいれうる譲歩によって彼らと妥協し、「上からの革命」にのりだす。「上からのブルジョア革命」は、ブルジョアジーに指導された革命が途中で挫折したのち、旧権力を廃止することなく、ブルジョアジーとの妥協において、旧権力が社会の経済構造のブルジョアの改革をおこない、地主階級をブルジョア階級に徐々に轉身させて、その支配体制をブルジョアの基礎のうえに再構築することを意味する。かくて「上からの革命」とは、まずなによりも、「下からの革命」にたいする専制権力の反革命の勝利なのである。

レーニンが、「プロレタリアートが一度も完全に勝利することのないブル

ジョア革命もありうる。その結果、旧君主制は、ブルジョア君主制へ、そしてまたブルジョア的＝帝国主義的君主制へとゆっくりと転化する⁽³⁾」と書き、ドイツをその例にあげている。ドイツで「上からの革命」が一応勝利しえた原因は、プロレタリアートの階級的未成熟と、ブルジョアジーの革命にたいする懐疑と臆病さにある。ドイツはそれを通して、絶対主義からボナパルティズムへと推転していったが、その過程はついに完成されなかった。国内的には、労働者階級と社会主義政党の急速な成長、対外的には、ドイツ資本主義の独占段階への移行にともなう世界政策の変化と帝国主義列強の対立激化が、そのような余裕をあたえなかったのである。

以下、帝国主義段階以前をドイツについて考察し、それ以後をロシアについて考察し、「上からのブルジョア革命」の論理をより具体的に追求していく。

- 註 (1) 拙稿「農商工高等会議について——日本帝国主義成立史上の一論点」『同朋学報』第12号、1965年6月、73～4ページ、参照。
- (2) Karl Marx-Friedrich Engels Werke, Band 4, Institut für Marxismus-Leninismus beim ZK der SED, Dietz Verlag, Berlin, 1959, S. 346. 以下、マルクス・エンゲルスからの引用は、邦訳大月書店版『全集』ならびに『選集』による。訳文をかえることがある。
- (3) エンゲルス「『ロシアの社会状態』のあとがき」『全集』第18巻、687ページ。
- (4) エンゲルス「オーストリアの終焉のはじまり」『全集』第4巻、522ページ。
- (5) チホミーロフ「党の任務」『人民の意志』第2号（和田春樹「近代ロシア社会の構造」『歴史学研究』別冊特集、1961年10月、11ページ所収）。
- (6)(7) マルクス「道徳的批判と批判的道徳」『全集』第4巻、370ページ、傍点原文。
- (8) 「『ロシアの社会状態』のあとがき」『全集』第18巻、689ページ。
- (9) エンゲルス「プロイセンの軍事問題とドイツ労働者党」『全集』第16巻、53～4ページ。
- (10) マルクス「『祖国雑記』誌編集部への手紙」『選集』第13巻、180～1ページ。
- (11) エンゲルス「『ドイツ農民戦争』（1870年および1875年版）への序文」『全集』第7巻、548ページ。
- (12) エンゲルス「反デューリング論」『選集』第14巻、218ページ。

- (13) 「『ロシアの社会状態』のあとがき」『全集』第18巻, 688ページ。
- (14) エンゲルス「亡命者文獻」『全集』第18巻, 555ページ。
- (15) レーニン「ロシア革命の強さと弱さ」『全集』第12巻, 360ページ。以下、レーニンからの引用は、邦訳大月書店版『全集』による。
- (16) ハー・エイドウス「日本における未完成のブルジョア革命としての明治維新」『講座・日本近代法発達史』第11巻, 勁草書房, 1967年, 322ページ。
- (17) レーニン「革命的民主主義派の政綱」『全集』第17巻, 207ページ。
- (18) レーニン「ブルジョアジーの『左翼化』とプロレタリアートの任務」『全集』第15巻, 389ページ。

2 ドイツ——外見的立憲主義

19世紀初頭、イギリスでは、産業革命がはやくも終盤にさしかかり、フランスでは、大革命後の新しい社会秩序の建設がおわり、ようやく産業革命をむかえようとしていた。この両国を西に控えるドイツとしては、急速に産業の資本主義化を達成しなければならなかったが、ドイツにおけるブルジョアの発展の当時の段階では、その前提となる封建的諸拘束の撤廃、農民解放を下からの力で実現することはできなかった。それは、ナポレオン戦争の衝撃をうけて、上からの善政としてきわめて制限された形ですすめられた。

すなわち、西部では、すでに18世紀後半に、独立自営農民がうまれつつあったが、ナポレオンの占領下でフランス型の解放をあたえられ、ナポレオン農民が成立した。以後、この地方では、農民層の分解が進行して、資本家的農業経営の発展をみるようになった。東部でも、イエナの敗戦を契機に、プロイセンにおいて、全般的な「農民解放」(Bauerbefreiung)が、1807年以降数次にわたっておこなわれた。シュタイン＝ハルデンベルグの改革がこれである。改革は、土地所有農民の創出を意図してはいたが、土地貴族の利益にそってすすめられた。農民の解放条件は有償であって、現金支払または農民保有地の割譲によっておこなわれたから、かえって旧来のグーツヘル＝農民関係に基づく領主経営を、全国的統一的にユンカー経営へ移行させること

になった。「土地所有の自由」は、農民にとって「土地喪失の自由」でしかなかったのである。そして、この移行過程は、19世紀中葉にいたってほぼ完了する。また、手工業においても、西南ドイツ諸邦では、すでに18世紀以来、同業組合的拘束が撤廃されはじめていたが、とくにナポレオン戦争によってその撤廃が促進された。プロイセンでも、シュタイン＝ハルデンベルグの改革によって営業自由の原則が認められ、手工業者同業組合は決定的な打撃をこうむっていた。

かくてドイツにおける商業資本の活動はにわかに活発になり、資本主義的工業の躍進をみるにいたった。1830年以降とくに1840年以降、ライン・シュレージェン・ザクセン・ベルリンおよび南部の少数の大都市に工場制工業が起り、地方の家内工業はますます発展し、鉄道建設が促進され、大西洋横断航路が開設された。ドイツは決定的に世界市場のなかにひきこまれ、ドイツの商人たちは、外国貿易のますます大きな部分を仲介し、そしてしだいに、イギリスばかりでなくドイツの工業製品の販売にもたずさわようになった。「わかいドイツの工業は、世界市場で自分の力をためさなければならなかった。それはただ、輸出によってだけ大きくなることができたのだった。そのためは、ドイツの工業が外国で国際法の保護をうけることが必要であった。」⁽¹⁾ナポレオンの敗北とともに、ウィーン会議によりドイツ同盟 (Deutscher Bund) が成立したが、それはまだ統一国家にほど遠い国家連合 (Staatenbund) にとどまっていた。メッテルニヒの反動政治は自由主義運動を弾圧したが、立憲政治と統一国家を要求する運動がたかまった。統一的な祖国にたいする要求は、きわめて強力な物質的背景をもっていた。「それは、商業と工業の自由な発展をさまたげている、歴史的にうけつがれてきた、小国のがらくたを一掃し、ドイツの実業家が世界市場に足をふみいれようとのぞむなら、まず国内で克服しなければならなかったよけいな摩擦——彼の競争者たちはすべてそれから解放されていた——をすべてとりのぞきたいという、実際の商人や工業家の直接営業上の必要からでてきているのであった。ドイツ

の統一は、一の経済的必要物となっていた。⁽²⁾

しかし、ドイツの統一は、けっしてドイツだけの問題ではなかった。「ドイツの統一は、諸侯その他の内敵に抗してばかりでなく、また外国に抗してたたかいとられなければならなかった。」⁽³⁾ 国家的統一と独立の実現は、ドイツのブルジョア的発展にとっての国民的課題であったが、ブルジョアジーには、自力でそれを勝ち取る力はなかった。「1848年までは、ドイツにはじつのところ大工業はなかった。手工業が圧倒的であって、蒸気や機械は例外的にみうけられたにすぎなかった。」⁽⁴⁾ イギリスの大工業とフランスの国民軍、それはふいドイツの解放者・未来の理想であると同時に、理想実現のための当面の障害でもあった。こうした条件のもとでは、市民社会の実現に統一国家の建設が先行しなければならなかったが、それは上からの改革に期待するほかなかった。かくて絶対主義の主導による国民国家の形成と、いわゆる「プロイセン型の近代化」が必至となり、封建制と資本主義の妥協的結合がうみだされるのである。

1843年の関税同盟の成立により、ドイツ統一への第1歩がふみだされた。プロイセンは、上からの統一の道をめぐってオーストリアに勝利した。だが、「肝心なことは、この関税同盟が中小諸国家の全ブルジョア階級をプロシヤの味方にしたということだった。……そして関税同盟がひろがり、諸小国がこの国内市場にくわればくわわるほど、ますますこれら諸国の新興ブルジョアたちは、彼らの経済的覇権の持主であり、また将来における政治的覇権の持主でもある、プロシヤのほうに目をむけるようになったのだった。」⁽⁵⁾ ブルジョアジーは、プロイセンにおいてもますます勢力を強め、自由主義的改革と新しい政治形態を要求するようになった。国王は、ブルジョアジーから財政援助を仰がなければならないので、いやいやながら、ごくわずかずつ、ブルジョアジーにたいして経済的譲歩をあたえなければならなかった。関税同盟の成立と鉄道の建設につれて、大規模な起債の必要が生じたので、フリードリッヒ・ヴィルヘルムIV世は、1847年2月、8つの州会を単一の議会とし

てベルリンに召集した。しかし、国王と州会は正面衝突し、合同州会は、真の国会開設とその定期的召集を要求し、募債に同意することを拒否した。かくて6月、合同州会は解散され、これを契機に、プロイセンの専制政治にたいする反対が急速にひろがった。

1848年3月、ヴィルヘルムIV世は、統一議会の定期的召集の用意があることを声明し、ベルリンに第2回合同州会を召集して自由主義的改革に着手したが、時すでに遅く、パリに起こった2月革命はドイツに飛火し、ヴィーンとベルリンに革命が起った。その結果、「ブルジョアジーの代表者の政府」⁽⁶⁾である、カンプハウゼン＝ハンゼマン内閣が成立した。そして、将来における憲法と選挙法の制定が確約され、出版・集会の自由、予算・租税にたいする国会の同意権を約束した4月6日の法律、および普通選挙による国民代表議会の開設を約束した4月8日の法律が成立した。ドイツのブルジョアジーは、労働者と下層市民の力をかりて専制権力を打ち倒し、直接に権力をにぎった。「革命は、絶対君主制の全勢力、すなわち貴族、官僚、軍人および僧侶を倒した。革命は、ひとり上層ブルジョアジーだけを支配の座につけた。」⁽⁷⁾しかし、勝利のつぎの瞬間に、労働者階級の独自の運動がはじまると、ブルジョアジーはたちまち恐怖におそわれ、「労働者の援助でたったいま打ち負かした当の官僚と封建貴族の庇護下に逃げかえ」⁽⁸⁾り、年来の味方に背を向けるにいたった。「しかも、このときドイツのブルジョアジーは、ドイツのプロレタリアートを恐れるというより、むしろフランスのプロレタリアートを見て恐れをなしたのである。」パリ労働者の叛乱は、彼らに何を期待しなければならぬかを教えた。そしてこの日から、彼らは、独占的な政治支配への力をうしない、反動派と攻守同盟をむすんだのである。

「こういう危険をまえにして、以前の意見の相違はみな消滅した。勝利した労働者は、まだなにひとつ彼ら自身のための独自の要求を表明していなかったのに、この労働者に対抗して多年の敵味方が手を結んだ。しかも、ブルジョアジーと転覆された制度の支持者たちとのこの同盟は、ベルリンのパリ

ケードそのものの上で結ばれたのである。⁽¹⁰⁾「ブルジョアジーは、3月にかたづけられた封建党と結ばないでは、それどころか、結局はこの封建的絶対主義党にふたたび支配権を譲らないでは、この目的(労働者の抑圧——那須)を達することができないのであるが、それでも彼らは、自分たちのために次のような条件を確保した。すなわち、もし、すでに今日、革命運動にいわゆる平和的な発展の道をとらせることさえできれば、やがて政府の財政難を媒介として支配権がブルジョアジーの手にはいり、ブルジョアジーの利益がすべて確保されるような、そういう条件である。⁽¹¹⁾」かくて1848年11月、反動派の反革命クーデターが成功し、12月、プロイセン国民議会は解散された。西南ドイツの蜂起も、1849年7月半ばにはまったく鎮圧された。こうして、最初のドイツ革命は終結をみたのである。

革命のかかる結末は、ドイツのブルジョアジーの特異性によるものであった。「ドイツの現状のみじめさは、主として、自己の生産部門をとくに (par excellence) 国民的な生産部門とし、それとともにみずから全国民の利益の代表者の地位にのぼるほどに強力な階級が、これまでにただ一つもなかった点にある。⁽¹²⁾」「プロイセンのブルジョアジーは、1789年のフランス・ブルジョアジーとは違って、古い社会の代表者である王権や貴族に対抗して、近代社会全体を代表する階級ではなかった。……彼らは、自分自身すでに古い社会に属していたため、はじめから、人民を裏切りやすく、古い社会の代表者である王権と妥協しやすい傾きがあった。⁽¹³⁾」

結局、革命は完成されなかった。それは、なかばの革命にすぎず、ながいジグザグの革命運動の発端にすぎなかった。「ドイツ国憲法戦役は、それ自身の中途半端さと内部的なみじめさのために挫折した。1848年6月の敗北以来、ヨーロッパ大陸の文明諸国にとっての問題は、革命的プロレタリアートの支配か、2月革命以前に支配していた諸階級の支配か、ということである。中道はもはや不可能である。……この戦役が敗北に終わったあとでは、いくぶん立憲化した封建的—官僚的君主制が勝利するか、それとも真の革命が勝

利するか、そのどれかでしかありえない。しかも、ドイツでは、革命は、プロレタリアートの完全な支配がうちたてられるまでは、もはや終結することはできない。⁰⁴」

1850年のプロイセン憲法は、法の下での平等、各種の市民的自由、自由権的基本権の保障、立法権は国王と両議院が共同しておこなうこと、執行権は国王、司法権は裁判所に属すること、あるいは国王の権限についての規定など、一応立憲的な形態をとっていたが、この憲法の性格をなによりも現実⁰⁴に示しているものは、「予算争議」とよばれる事件である。すなわち、1862年、ヴィルヘルム I 世は、プロイセン陸軍の大改革を計画して軍制改革案を議会に提出したが、進歩党が反対したために否決されるにいたった。ここで、ビスマルクが首相に任ぜられ、事態の收拾にあたることになった。彼は、妥協は不能であるとして憲法に反して軍制改革を強行し、1866年には、オーストリアを破って北ドイツ連邦結成の端緒を開いた。ブルジョアジーは、プロイセン軍の勝利に夢中になった。ビスマルクは、議会に免責法を提出してこの期間における予算の事後承認をもとめた。進歩党は分裂して国民自由党が出現し、その支持により免責法は可決された。そして、国民自由党は、その後、ビスマルクの企図を積極的に支持したのであった。この予算争議は、一言でいえば、議会の多数派およびその議決にたいする挑戦・闘争であった。そして、その目的は、君主は議会によって制肘されないという、君主制の原理を貫くことにあった。

ビスマルクは、ブルジョアジーに真の力関係を手にとるように説明し、彼らの自由主義的な幻想を強引に粉碎した。「ドイツのブルジョア階級は、依然として周知の矛盾のなかで動揺していた。一方では、彼らは、独占的な政治権力を自分の手に、つまり自由主義的な議会の多数派によってえられた内閣の手にうつそうと要求していた。そしてかかる内閣は、そのあたらしい、権力掌握者たる地位が決定的に承認されるまでには、王冠によって代表されている旧制度とは、10年にもわたる闘争をおこなわなければならなかったで

あろう。したがって、10年間は国内を弱めたであろう。だが他方では、彼らは強力によってのみ、したがって事実上の独裁によってのみ実行しうるドイツの革命的変革を要求していた⁽¹⁶⁾のである。「ボヘミアの戦場でうちやぶられたのはオーストリアではなかった、——ドイツのブルジョアジーもまたうちまかされたのだった。ビスマルクは、ドイツのブルジョアジーに、彼らにやくだつものなんであるかを、彼のほうが彼ら自身よりもよくしていることを証明した。……ブルジョアジーの自由主義的な諸要求は、ながいあいだほうむりさられていたが、彼らの国民的な諸要求は、日々ますますみだされていった。」⁽¹⁶⁾かくして、紛争はおのずからかたづき、そしてビスマルクは、彼の模範であるルイ・ナポレオンとまったく同じように、ブルジョアジーの偶像となったのである。ビスマルクは、まさに「上からの革命家」であった。上からの革命の推進によって、憲法上の紛争がとりのぞかれたことは、ブルジョアジーに、「執行権力は当分のあいだはなお彼らにはせいぜいきわめて間接的にぞくしているにすぎないということ、彼らは大臣を罷免することもおしつけることもできないし、さらに軍隊を自由にうごかすこともできないということ」⁽¹⁷⁾を教えてくれた。

1867年の北ドイツ連邦憲法は、予算争議によって解釈しなおされたプロイセン憲法に範をとってつくられた。プロンセン優越・ドイツ統一主義・反議会主義、これがこの憲法の特徴であった。しかし、関税議会 (Zollparlament) をしだいに帝国議会にかえて、南部の諸国家をしだいにこの新連邦にひきこもうという試みは挫折した。「ただプロシヤだけが、彼らにたいして強大であり、しかもこれらの国々を保護するにじゅうぶんなだけ強力でもあるという、一つのあたらしいはっきりとした証明だけが——したがってただ一つのあたらしい全ドイツをあげての戦争だけが」⁽¹⁸⁾、すなわちフランスとの戦争だけが、南部諸邦の屈伏とドイツ統一の完成を急速にもたらすことができたのである。かくて1871年、ドイツ帝国は、硝煙のなかで呱呱の声をあげた。外国の干渉からの独立と統一が、戦場でかちとられたのである。

1871年のドイツ帝国憲法は、プロイセンの優位と反議会主義を特徴としていた。第1に、プロイセン国王が同時にドイツ皇帝であり、プロイセン首相が同時に帝国宰相であった。帝国宰相は、皇帝と連邦参事会との間にあって両者を結びつける。すなわち、宰相は、連邦参事会の議長であると同時に皇帝の大臣であり、皇帝にたいして責任を負っていた。第2に、連邦参事会(Bundesrat)は、連邦を構成する25の諸邦の代表者から成る(プロイセンは58議席中17議席を占める)使節会議であり、それぞれ各邦政府により任命され、その訓令に拘束されていた。その権限は、立法権(法律の裁可権、立法提唱権)・行政権(帝国議会の解散、宣戦・条約締結への同意)・司法権(各邦間の争訟の裁決、各邦内部の憲法争議の裁判)の3権におよび、ドイツ帝国の主権の保持者としての地位にあった。それは連邦制国家の議会における上院とは異なり、帝国政府の最高合議機関として、議会とは独立した国権の最高機関性をもっていた。第3に、帝国議会(Reichstag)は、ドイツ国民の代表として、普通・直接・秘密選挙により選出された397名(うち、プロイセンは236名を占める)の議員からなり、法律の発案権・議決権、予算審議権、決算承認権、条約承認権をもつが、宰相以下の関係は議会に責任を負わず、議会は政府を拘束するなんらの権限ももたなかった。

以上要するに、ドイツ帝国憲法は、「国民とその代表機関とに付与された諸権利によってはかるときは、1850年のプロシヤ憲法の純然たるひきうつし⁽¹⁸⁾」であった。政治機構においては、権力分立制と連邦制とがからみ合っており、帝国宰相を回転軸として、皇帝・帝国議会・連邦参事会の3機関が、互いに分離され、また結びつけられて、特殊な関係を示していたところに特色があった。「帝国憲法は、やがてばくろされたように、ビスマルクの『身体にあわせてしたてられて』いた。それは、帝国議会では諸政党の、連邦参議院では連邦諸国の、均衡をはかることによって、彼の個人的独裁への道を一步前進すること——ボナパルティズムへの道を一步前進することだった。⁽¹⁹⁾」

ボナパルティズムへの道は、もはや、ルイ・ナポレオンの政策のたんなる

模倣ではなく、現実的な基礎をもっていた。第1に、ドイツの大工業は、「1840年代に始まり、1848年の革命のおかげで最初の飛躍をなしとげたが、1866年と1870年の革命がすくなくとも最悪の政治的障害をその行く手からとりのぞいたのちに、はじめて完全に発展することができた。」²¹とくに、フランスの償金50億フランの流入は、大工業を躍進させ、1873～74年の恐慌をひきおこした。「この大恐慌によって、ドイツは世界市場に登場する能力をもった工業国であるということを、みずから実証したのである。」²²第2に、ほかならぬプロイセン軍隊の勝利が、プロイセンの国家構造の基礎全体を移動させたことである。旧プロイセンは根本的にはユンカー階級に依拠しており、ユンカー階級が十分に繁栄して存在しているのは、エルベ以東の6つの州であったが、この1450万人の旧プロイセン人にたいして、以前から旧プロイセンのユンカー的封建制のおおえなくなっていた、およそ2500万人が対立するようになった。「ユンカー支配は、政府自身にとってさえますますがまんにならないものとなった。だが、それと同時に、工業の急激な発達の結果、ブルジョアと労働者との闘争がユンカーとブルジョアとの闘争にとって代ったため、旧国家の社会的基礎は内部的にも完全な変革をこうむった。……ひしひしと迫ってくる労働者階級から有産階級全体を守ることが必要となったその瞬間から、旧絶対君主制は、わざわざこの目的のためにつくりだされた国家形態であるボナパルティズム君主制に完全に移行しなければならなかった。」²³

ところが、「プロイセンはまさしくいまなお半封建的な国家であった。だが、ボナパルティズムは、ともかく封建制の除去を前提とする一つの近代的な国家形態である。だから、プロイセンは、そのおびただしい封建的遺物をとりはらって、ユンカー制度をそのものとしては犠牲にする決心をしなければならぬ。」²⁴「さきにビスマルクが、自分の以前の見解に反して、営業の自由、各邦間の移動の自由およびその他のブルジョアの諸改革を——もちろん官僚的に不具にされたかたちで——実現せざるをえなかったように、歴史

の皮肉がついに、このうえもない〔par excellence〕ユンカーである彼に、郡条令によってユンカー階級に斧をくわえるという運命を背負わせたのである。」この郡条令は、「個々のユンカーから、封建的特権のおかげで彼に帰属している権力を取りあげて、郡自治のよそおいのもとに、その権力をユンカー階級に返すのである。以前と同じくこれからも、巨大土地所有と大土地所有とが東部諸州の農耕地帯を支配してゆくであろう。……しかし、個々のユンカーは、彼が封建領主として有していた特別の地位を失う。彼はふつうの近代的土地所有者にまで低下し——そしてそれとともにユンカーであることをやめる。……郡条令の成立とともにユンカー階級はなくなり、そしてユンカー階級がなくなればもはや特殊のプロイセンもなくなる。⁽²⁵⁾」かくて1874年、エンゲルスは書いている。「こういうわけで、プロイセンは、1808年から1813年のあいだに開始し、1848年にすこしばかり前進させたそのブルジョア革命を、今世紀の終わりにボナパルティズムという気持のいい形態で完成するという、奇妙な運命をもっているのである。もし万事が順調にすすみ、世界もしごく穏やかにすぎ、われわれみな十分長生きするなら、おそらく1900年にはわれわれは、プロイセン政府がほんとうにいっさいの封建的制度を廃止してしまい、プロイセンがついに1792年にフランスが立った地点にたどりつくのを、見ることができるだろう。⁽²⁶⁾」

たしかに、プロイセンで経済構造のブルジョアの改革が開始されたのは1808年であったが、政治的支配形態の変革が開始されたのは1848年の革命以後であった。「下からの革命」が勃発し、労働者階級がブルジョアジーの指導をのりこえて独自の運動を開始すると、絶対主義は労働者階級の抑圧という新たな政治的機能をもたなければならなくなった。「プロイセンで（そしてその先例に従ってドイツの新帝国制度のもとでも）、こういう矛盾にみちた社会状態のなかから必然的な帰結として発展してきた国家形態は、外見的立憲制である。この形態は、古い絶対君主制の、今日における解体形態であるとともに、ボナパルティズム君主制の存在形態でもある。プロイセンでは、

1848年から1866年までの外見的立憲制は、絶対君主制の緩慢な腐朽を隠蔽し媒介したにすぎなかった。しかし、1866年以来、とくに1870年以来は、社会状態の変革が、そしてそれとともに古い国家の解体が、万人の見るなかで、ますます大規模にすすんでいる。……一言でいえば、古い国家のあらゆる要素の分解、絶対君主制からボナパルト君主制への移行が、さかんに進行しているのである。」⁷⁰しかし、外見的立憲制というのは、国家の統治機構の形態にかんする概念であり、階級関係の変遷や階級闘争の結果によって変化する国家の政治形態とは、一応区別して考察される。したがって、絶対君主制からボナパルト君主制への移行を問題とするためには、歴史的具体的に、国家の階級性格を検討しなければならない。

ドイツのブルジョア的発展にとっての国民的課題は、フランスの場合のような農業問題ではなく、国内の統一にあった。1848年の革命は、ブルジョアジーの指導による自由主義的な統一の道が途中で挫折したこと、これにかわって、プロレタリアートのドイツ共和国を通ずる革命的な道と、ビスマルクのプロイセン君主国を通ずる反革命的な道との、闘争の時代がはじまったことを意味していた。しかし、そこではまだ、ブルジョア革命のドイツ的完成は、実在的な基礎をもたないひとつの可能性にとどまっていた。この可能性が現実性に転化するのには、1860年代の憲法争議を通じてである。憲法争議を通じて、ブルジョアジーは、ビスマルクの鉄血政策すなわち上からの統一の道を積極的に支持するようになった。そして、1866年の併合は、国家内でのブルジョア的および農民的要素をいちじるしく強化した。さらに、1870年の南部諸邦の統合は、帝国内において少数派になりさがったユンカー階級にたいする痛烈な打撃であった。1866年から1870年にいたる国内的障害の除去によって、産業革命は大いに促進され、資本主義経済構造の確立をみるにいたった。プロイセン絶対主義は、西南部の産業ブルジョアジーと近代的地主に転化しつつある東部のユンカー階級との、2重の基礎のうえにたつことになった。もはやいかに専制的な政府でも、現存諸条件を考慮に入れて統治せ

ざるをえなくなった。かくて絶対君主制からボナパルト君主制への移行が急速にすすんだのである。すなわち、1848年から1866年までは、無制限の専制から外見的立憲制への移行という絶対君主制のもとの統治形態の変化にとどまっていたが、1866年ごとに1870年からは、絶対君主制からボナパルト君主制への移行という政治形態の変革にまで発展し、旧国家の解体が公然と進行しはじめたのである。

かくてドイツ帝国の成立は、上からの統一の道が最後の勝利したこと、それによってブルジョア的発展の国民的課題が解決されたことを意味していた。ドイツ帝国の建設と発展は、ブルジョア革命の客観的課題、経済的諸任務を完全に実現した。ノンカーたるビスマルクが、ブルジョア的諸改革を遂行して、1848年の中途半端なドイツ革命の遺言執行人となった。「そしてこのときに、ドイツにおける一般民主主義革命の問題が消滅した。」それとともに、封建的土地所有の農民的破壊＝アメリカ型の道の可能性はいっさいとりのぞかれ、農業における資本主義発展の2つの道の闘争の時代はおわった。ドイツにおいて「上からの革命」が勝利しえた原因は、プロレタリアートの未成熟と、ブルジョアジーの革命にたいする懐疑と臆病さにある。こうして、ドイツでは、資本主義の国民的な道が最後の確立されたのであるが、絶対主義からボナパルティズムへの移行はついに完成されなかった。帝国統一後、国内的には、労働者階級と社会主義勢力の急速な成長、対外的には、ドイツ資本主義の独占段階への移行にともなう世界政策の変化と帝国主義列強の対立激化が、そのような余裕をあたえなかったのである。

もともと、「上からの革命」は、「下からの革命」に対抗して開始されたのであるから、その進展とともに国内の階級矛盾を激化させずにはおかない。1840年代にはじまるドイツの大工業は、「上からの革命」によって飛躍的な発展をとげたのであるが、その反面でプロレタリアートの成立・発展を促進した。1875年に結成されたドイツ社会主義労働党のその後の政治的進出は目ざましいものがあり、ビスマルクは1878年社会主義鎮圧法を公布してその弾

庄にのりだした。だが、この弾圧政策は、所期の目的とは反対にかえって社会主義勢力を助長させる結果となり、1890年には同法を廃止するだけでなく、ビスマルク自身も下野するにいたった。しかし、ビスマルクの失脚にはより基本的な理由が存在していた。すなわち、1890年までのビスマルク体制は、ユンカーとブルジョアジーとの妥協を基礎とするものであった。「1886年の今日なお、プロイセン国家とその基礎——すなわち、保護関税によってうちかためられた大土地所有と産業資本の同盟——が維持されているのは、まったく、1872年以後その人数においても階級意識においてもすばらしい成長をとげたプロレタリアートにたいする恐怖のためである。」²⁹ところが、帝国統一以後の資本主義の発展はブルジョアジーの政治的勢力を強大ならしめ、ビスマルクの政策もドイツ産業資本確立のための対外平和の維持、保護関税政策の採用に重点がおかれた。さらに1890年を転期として、政治的勢力関係に変化が生じた。ブルジョアジーは保護関税によって国内市場を征覇し、資本の集積・集中によって独占資本家にまで成長し、国外市場への進出、植民地の獲得を要求するにいたり、ビスマルクの外交政策は限界に逢着した。ビスマルクのヨーロッパの規模での対外政策は、新しい帝国主義段階には適応しえなかったのである。

ビスマルクの失脚後、政治的実権はヴィルヘルムⅡ世に移るが、政治機構は依然としてユンカーが掌握していた。ブルジョアジーは議会権限の拡張・責任内閣制の樹立をのぞんだが、帝国主義的進出のために軍隊の支持を必要とし、他方プロレタリアートに対抗するためにユンカーとのブロックを維持しなければならなかった。彼らは、自己の政治権力を断念することによって、経済的支配をあがなった。「ドイツ国は半封建的形態の君主国だが、つきつめてゆくと、それはブルジョアジーの経済的利害によって左右されている。」³⁰新しい帝国主義段階はヴィルヘルムⅡ世の世界政策によって展開され、それはドイツを駆って遅ればせながら国際的植民地争奪戦への割込みを企図せしめるにいたった。ブルジョアジーは直接の政治支配を実現することはできな

かったが、旧権力が、プロレタリアートに対抗してブルジョアジーを擁護し、彼らの経済的利益をブルジョア権力にかわって実現していった。かくて絶対君主制からボナパルト君主制への移行は未完成におわり、国王・官僚・軍隊の封建的特権は維持された。その結果、絶対君主の専制権力と封建的残存物を一掃する役割は、労働者と農民の手に移り、彼らは民主主義と社会主義との2重の課題を背負うようになった。

したがって、1866~70年以降のドイツは、本来のボナパルティズム、封建制の除去を前提とする近代国家を意味するものではない。それは、ボナパルティズムに移行しつつあり、しかもなお移行が完了していない絶対主義国家、すなわち、国家の経済的基礎の変化、政治的機能のボナパルティズムとの同一性にもかかわらず、むしろ、それ自身のうちに半封建的土地所有の地主的清掃の任務を内包しているところの、それ自身封建国家たるの本質を有しながら、自己否定を客観的使命として運動しつつあるところの過渡期の国家、と規定することができる。それは、絶対主義に継ぎ木されたボナパルティズム、エセ・ボナパルティズムである。19世紀後半の世界史の段階では、ボナパルティズムはもはやそのような形でしか存在しえない。そして、後進国のブルジョア革命は、古典的なブルジョア革命論や公式的な2段階革命論では、もはや正しく把握できないのである。

S. ムーアは、19世紀のドイツ革命を検討したのち、上からのブルジョア革命の条件としてつぎの3つをあげている。「第1は、移行期をつうじての2つの種類の生産関係の共存であって、この移行期に封建的生産関係は決定的な範囲で資本主義的生産関係にとってかえられる。第2は、経済的移行のあいだにブルジョアジーと貴族とを均衡させるほど充分に独立的な官僚制の存在である。第3は、資本主義的搾取者と封建的搾取者とが直面する共通の危険の結果として生じる強固な階級同盟であり、労働者階級に反対する統一戦線である。」⁶⁰ これら3条件にくわえて、さらに、つぎの2条件をあげなければならない。第1は、資本主義世界市場の成立であり、それなしには、絶対

主義国家における上からのブルジョア革命は始まりえない。後進絶対主義国が世界市場の一環にくみこまれて産業革命を開始せざるをえなくなり、同時に外から強い政治的・軍事的衝撃をうけて国内に革命的情勢が醸成された場合、旧権力は国家の階級の性格を変更する改革をおこなわざるをえなくなる。第2は、上からのブルジョア革命が完遂されうる条件として、国内的・国際的諸矛盾が、革命を途中で挫折させてしまうほどまでには激化していないことである。帝国主義の時代になると、このような条件は存在しなくなる。なぜなら、帝国主義の時代には、資本主義は地球上の全地域を併呑し自己の体内に同化して真に世界的な体制となり、帝国主義的葛藤のなかで先進資本主義列強に伍していくことが、後進絶対主義諸国の生存条件となるからである。

また、ビスマルク体制下のドイツにおいて、外見的立憲制、そのもとでのボナパルティズムへの移行という規定は、現に支配している階級と国家権力との相互関係を反映しており、したがって、国家の階級の性格をかなり正確に表現していたのであるが、ドイツが帝国主義段階にはいったのちには、かかる規定はもはや不十分なものとなる。なぜなら、帝国主義の時代には、一国の政治における性格だけではなく、世界政治における性格が重要な意味をもって来るからである。そして、国家の政治的支配形態の差異は、極度にその意義を減殺される。だがこれは、政治的差異が一般に重要でないからではなくて（それは、一国の政治全体の性格、したがってまた革命の見地からはなお重要な意義をもっている）、帝国主義を論じる場合には、寄生性の一定の特徴をそなえたブルジョア階級が問題となるからである。かくて帝国主義の時代には、国家の階級の性格は、世界政治における性格との関連で論じなければならないのである。

註 (1)(2)(3) エンゲルス「歴史における強力の役割」『選集』第16巻, 384, 386, 388 ページ。

(4) エンゲルス「ビスマルク氏の社会主義」『選集』第12巻, 326ページ。

(5) 「歴史における強力の役割」『選集』第16巻, 401~2ページ。

(6)(7) エンゲルス「革命についてのベルリンの討論」『全集』第5巻, 60, 65ペ

- ージ。
- (8) エンゲルス「プロイセンの軍事問題とドイツ労働者党」『全集』第16巻, 52ページ。
- (9) エンゲルス『『ドイツ農民戦争』(1870年および1875年版)への序文』『全集』第7巻, 442ページ。
- (10) エンゲルス「ドイツにおける革命と反革命」『全集』第8巻, 38ページ。
- (11) マルクス・エンゲルス「1850年3月の中央委員会の同盟員への呼びかけ」『全集』第7巻, 250ページ。
- (12) エンゲルス「ドイツの現状」『全集』第4巻, 48ページ。
- (13) マルクス「ブルジョアジーと反革命」『全集』第6巻, 104ページ, 傍点原文。
- (14) エンゲルス「ドイツ国憲法戦役」『全集』第7巻, 201ページ。
- (15)(16)(17)(18) 「歴史における強力な役割」『選集』第16巻, 416, 422, 424, 450ページ。
- (19) エンゲルス「1891年の社会民主党〔エルフルト〕綱領草案の批判」『選集』第17巻, 384ページ。
- (20) 「歴史における強力な役割」『選集』第16巻, 458ページ。
- (21)(22) エンゲルス「『住宅問題』再読第2版の序文」『全集』第18巻, 660, 666ページ。
- (23)(24) 「『ドイツ農民戦争』(1870年および1875年版)への序文」『全集』第7巻, 546~7ページ, 傍点原文。
- (25) エンゲルス「プロイセンにおける『危機』」『全集』第18巻, 291ページ, 傍点原文。
- (26) 「『ドイツ農民戦争』(1870年および1875年版)への序文」『全集』第7巻, 547~8ページ。
- (27) エンゲルス「住宅問題」『全集』第18巻, 254~5ページ。外見的立憲制については, 拙稿「日本近代史の時期区分」『名古屋大学法政論集』第13輯, 1959年12月, 163~4ページ, 参照。
- (28) レーニン「イ・イ・スクヴォルツォフ・ステパーノフへの手紙」『全集』第16巻, 125ページ, 傍点原文。
- (29) 「住宅問題」1887年版への原注『全集』第18巻, 255ページ。
- (30) エンゲルス「ドイツにおける社会主義」『選集』第17巻, 406ページ。
- (31) Stanley W. Moore, *The Critique of Capitalist Democracy—An Introduction to the Theory of the State in Marx, Engels and Lenin*, New York, 1957. (佐藤昇・相原文夫訳『マルクス主義国家論』214ページ。)

3 ロシア——軍事的封建的帝国主義

ロシアにおいても、ドイツと同様、資本主義発展の障害物を除去する歴史的課題は、絶対主義の打倒＝下からのブルジョア革命によってではなく、ツァーリズムの上からの改革によって解決された。

すなわち、すでに18世紀以来、新しく発展しつつある資本制生産とふるい農奴制度との矛盾が、しだいに激化しつつあった。この矛盾を緩和して自己の物質的基礎たる農奴制度を維持するため、ツァーリズムは、一方において、1803年以降数次にわたる勅令により、部分的かつ条件づきで農民を解放することをよぎなくされ、他方において、トルコ・ペルシア・極東への進出によって、資本主義の市場拡張の要求を充たしていこうとした。しかし、かかる政策は、クリミア戦争(1854~56年)の敗北とそれにつづく恐るべき財政難、および、いちじるしく激化した農民騒擾の圧力をうけて挫折した。かくて「下からの解放がはじまらないうちに上から解放しなければならない」と考えたアレキサンドルⅡ世により、1861年2月、農奴解放令が發布された。

農奴解放令により、農民は土地を分与されて身分的には地主にたいする隷属から解放されたが、決して真の意味で解放されたわけではなかった。第1に、農村共同体の制度が廃止されなかったため、農民は依然としてその束縛をうけた。第2に、警察・裁判・徴税・徴兵などの旧領主の公権は編成替えされた共同体に移管され、その共同体のうえに、はじめは領主や調停吏が、のちには領主から選ばれた地方長官が監督権をふるい、実質的には領主権に近い機能を保持していた。第3に、耕作農民にたいする土地分与は買戻金付きでおこなわれ、しかも農民保有地の多くの部分が切取地(オトレスキ)として地主に取り上げられ、農民の大部分は独立的な農業経営を不可能にされた。そのため、改革後も農民は賦役制度と本質的にかかわらない雇役制度(オトラボトカ)のもとに、地主の土地を耕作せねばならなかった。第4に、買戻金未

私の場合には、分与地を「一時義務負担農民」として用益するため、またそれを農民＝土地所有者として所有するために、農民が支払わなければならなかった「義務」＝地代や償却額＝地価は、土地の収益をはるかに上回るものであった。つまりそれは、農奴制時代の貢租や賦役と全く同様に、経済外的強制によってはじめて徴収しうる性質のものであった。⁽¹⁾

このように、農奴解放は人格解放の点でも土地分与の点でも不徹底であったが、それにもかかわらず、その内容は「ブルジョア的」⁽²⁾であった。すなわち、それは、第1に、土地を分与されなかった農奴（＝奴婢）を領主権から解放すると同時に、土地からも解放して資本の搾取にゆだね、第2に、土地を分与された農奴には償却金・人頭税の支払いを強制し、その莫大な資金を国家の手であるいは地主の手を介して資本に転化する政策であった。いわば農奴制度を資本制再生産構造のなかに直接・間接にくみこむ政策であった。そして、その後のツァーリズムの農業政策は、一貫して農村共同体の強化にむけられた。それは、農民を土地に緊縛してその分解を阻止するためであったが、そのことがまた、雇役制的地主経営に労働力を確保し、農奴主的土地所有を資本制適応的土地所有へ転化しつつその温存をはかる基盤ともなった。かかる意味で、農奴解放は「資本主義のための地主的『土地清掃』」⁽³⁾の第1歩であった。そして、ツァーリズムは、「純農奴制的な専制からブルジョア的君主制への転化の途上」⁽⁴⁾の第1歩をふみだしたのである。

「クリミア戦争での敗北によって、ロシアがすみやかに工業を発展させる必要があることが明らかになった。なによりも、鉄道が必要であった。そして鉄道は、国内の大工業がなければ、大規模に敷設することができない。この大工業を創設する前提条件が、いわゆる農民解放であった。この解放とともに、ロシアには資本主義時代が始まった。」⁽⁵⁾クリミアの敗戦は、ツァーリズムに農奴主的支配体制の破綻を痛感させた。ツァーリ政府は、農奴解放に並行して、鉄道建設、金融・財政・関税などの経済制度の改革を実施し、資本の本源的蓄積を促進した。これにとまって、すでに大工業段階にさしか

かっていた綿業をはじめ、繊維・石炭・鉄・機械などの主要工業生産は、1860～70年代に2倍以上に発展した。「ロシアのブルジョアジーは、こんにちすでにいたるところで、人民の労働を手中におさえているばかりでなく、さらに政府に圧力をくわえ、政府の政策のブルジョアの性格を生みだし、強要し、規定している⁽⁶⁾」「国家は、重要な経済問題ではすべてブルジョアジーの言いなりにならなければならない。ブルジョアジーが、たとえそのあいだにツァーリやその官吏の専横な専制をなお甘受しているとしても、それはただ、この専制が、いずれにせよ官僚の買収によって緩和されているうえ、ロシアの内幕からみだれにもその結果が予測できないような変革——ブルジョア自由主義的なものさえふくめて——よりも、より多くの保証をブルジョアジーに提供しているからにほかならない。⁽⁷⁾」

「だが、それとともに、土地の共同所有の急激な破壊の時代も始まった。租税が増徴されると同時に、農民への分与地が小さくなったり劣等なものになったりしたうえに、農民に償却金の支払が課されたため、彼らは、まちがいなく、大部分は農民共同体員中の成金どもである高利貸の手中に落ちた。鉄道は、多くの従来辺鄙であった地方にたいして、そこの穀物を売りにだす販売市場をきりひらいてやったが、しかしまた値段の安い大工業の生産物をその地方にもちこみ、そのことによって、それまで一部は自家用に、一部は販売用に同じような製品をつくっていた農民の家内工業を駆逐した。昔から慣行となっていた生産諸関係が混乱におとし入れられ、いたるところで自然経済から貨幣経済への移行にともなう破壊が生じ、共同体成員のあいだの、財産の大きな懸隔が共同体のなかに現われてきた。⁽⁸⁾」農業においても、部分的には、自由な賃労働による資本家的経営の発生をみるにいたったが、なお全体的には、雇役による地主経営が支配的であった。雇役制度は、たんなる農奴制の遺物ではなく、農奴制廃止後の基礎過程の変化に適應した地主的土地所有の形態であり、雇役制的労働報酬体系の存在を媒介にして全体としての資本主義的再生産構造の一環に結合され、そのことによって展開をつづけ、

低賃金にもとづくロシア資本主義全体の再生産構造をささえていた。⁽⁹⁾

1860～70年代に急速に成長したロシアの資本主義は、80年代の不況期をへて、1891年からふたたび空前の好況期をむかえた。この大工業化を推進したのは、ヴィッテによって遂行された政府の経済政策——鉄道建設・保護関税の強化・金本位制の実施・専売制度の確立・外債募集など——であった。ヴィッテの経済政策は、一般的に大工業の発展をめざしたのではなく、農民収奪と外債募集によって調達した資金を鉄道建設に投下して重工業製品への需要をつくり出し、外資により重工業中心にロシア資本主義の発展をはかろうとする政策であった。またそれは、ロシアを農業国から工業国に転換させて、先進帝国主義列強の国際的な争覇戦に伍していこうとする政策であった。ヴィッテは、1900年2月の「わが国工業の状態について」というニコライII世あての報告のなかで書いている。「政治的、経済的な国際関係の現状にあって……十分発達した自国の工業をもたない農業国はその国威がゆるぎないものと考えすることはできない。」「広汎にして多様な工業をつくり上げるといふ国民的必要を満たすにあたって、ゆっくりやってよいと考えるとすれば、破滅的な歴史的誤謬を犯すことになる。国際競争は待つてくれないのだ。」⁽¹⁰⁾

しかし、ロシアの経済的自立をめざすヴィッテの経済政策は、工業企業にたいする保護政策と外資流入によって、かえって激しい財政難とロシアの世界金融資本への従属、とくにフランスのそれへの従属をもたらした。1899年のヨーロッパの経済恐慌は、ロシアの外債募集を困難にし、1890年代の大昂揚に終止符をうった。また、ヴィッテの経済政策は、農民に大工業化の犠牲をおしつけ、農業の発展を阻害するという矛盾をもっていた。その結果、国内市場は工業の急激な発展に追いつけず、いちじるしく遅れた農業の存在がロシア資本主義の発展を根底において制約していた。ロシアが大工業国になろうとするならば、農村共同体を破壊して農民の大部分をプロレタリア化し、社会の経済構造を根本的に変革しなければならなかった。1900～03年の恐慌のなかで、これらいっさいの矛盾が爆発し、ヴィッテは反対派の攻撃にあっ

て大蔵大臣を罷免された。経済恐慌は政治的危機に発展し、この危機を乗り越えるために企てた極東での軍事的冒険が、日露戦争におけるツァーリズムの敗北におわると、1905年の第1次ロシア革命が勃発した。

第1次ロシア革命は失敗におわったが、ツァーリズムは一連の譲歩をよぎなくされた。その結果、ツァーリ専制はブルジョアの立憲君主制へ移行するかにみえたが、それはたちまち幻想にすぎないことが明らかになった。

1905年10月の全ロシア政治ゼネストののち、大臣会議議長ヴィッテによって起草された10月17日の宣言は、政治的自由の保障と立法国会の召集を公約していた。宣言に署名したニコライII世は、「この日から終日頭が重く、心は千々に乱れる、神よ、我を救いたまえ、ロシアを平穩に⁰⁰!!」と日記に記した。しかし、12月のモスクワ蜂起の敗退後、革命の衰勢が明らかになると、ヴィッテが立憲君主制化の期待を托した10月17日の宣言は後退し、革命の成果はたちまち消散してしまった。翌1906年4月23日に発布されたロシア帝国基本法は、「最高の専制的権力は全ロシアの皇帝に属する」と規定し、君主の大権は、基本法改正の発議、国内全般の統治権、対外政策の指導、宣戦・講和、陸海軍の統帥・編成、戦闘・戒厳地境の布告、貨幣製造権、大臣任免権など、きわめて広範にわたっていた。国家機関は、皇帝直属の3大機関、大臣会議・国家評議会・国会から構成されていたが、国会は立法権を大幅にけずりとられ、一種の諮問機関に墮していた。すなわち、国会の可決した法律案は、国家評議会の承認と皇帝の裁可をへてはじめて効力を発した。法律発案権、国会の召集・解散権、会期決定権は皇帝に属し、大臣会議は皇帝にたいしてのみ、責任を負っていた。しかも、国会の選挙制度は、クーリア別の間接・不平等選挙制をとっていた。このように、ロシア帝国基本法は、近代憲法としての重要な要件を欠いていたが、それにもかかわらず、国会の開設は、ツァーリズムの統治形態の変革を意味していた。

たしかに、ロシアで経済構造のブルジョアの改革が開始されたのは1861年であったが、それが政治的支配形態の変革にまで発展したのは1905年の革命

以降であった。その意味では、ロシアの1861年はドイツの1808年に、1905年は1848年に相当していた。ツァーリズムが「国会を開設したことは、疑いもなく、革命にたいする譲歩ではあるが、……革命を弾圧し憲法をあたえないためにこそ行われた譲歩である。」⁽¹⁴⁾「専制にとってはブルジョアジーと『和解』することが必要であり、専制はそれにむかって努力せざるをえない。……ところで国会は、この目的のためのすばらしい手段である。」⁽¹⁵⁾「ブルジョアジーは資本の支配を保障するために、官僚制度ではなく議会制度をのぞむが、それと同時に君主制や、常備軍や、官僚のある種の特権の維持やを——革命を最後まで遂行させないために、またプロレタリアートを武装させないために——のぞんでいる。」⁽¹⁶⁾しかし、ブルジョアジーは、「専制と権力の分割についてまだ最後の協定をむすんでいない。」⁽¹⁵⁾したがって、専制はまだなんらの実質的制限もうけていない。このようなツァーリズムを、レーニンは、「えせ立憲主義」⁽¹⁶⁾、「立憲的専制」⁽¹⁷⁾と規定した。そこでは、ツァーリズムの政治形態の変革、つまり絶対君主制からボナパルト君主制への移行は、まだひとつの可能性にとどまっており、現実的基礎をもっていなかった。この可能性が現実性に転化するためには、専制とブルジョアジーとの最後の和解が成立し、そのうえにたつて、ロシアのブルジョア的発展の国民的課題である農業問題が解決されなければならなかった。

〔補註〕

1861年から1905年までの時点では、ツァーリズムの階級的性格にはまだ本質的な変化は生じていない。

和田春樹氏は、「近代ロシア社会の構造」(『歴史学研究』別冊特集, 1961年11月)のなかで、権力の階級の本質を決定する要因を国家の経済政策にもとめ、『大改革』時代にツァーリズムの経済政策の基調が資本主義発展に適応し、それを育成する方向に変わった……このことは権力が農奴主の権力から資本家と地主の権力に変化したことを示しているように思われる。この新しい権力をわれわれは近代ツァーリズムとよびたい」と書いている。だが、これは誤っている。権力の性格を決定するものは、経済政策ではなく、むしろ抑圧政策である。国家の本来の機能は、経済的機能ではなく、政治的機能である。国家の階級の本質は、階級的

基礎によって規定されるのであり、現象的には、国家がいかなる階級関係を維持していこうとしているかということによって決定される。だから、国家権力が持続的におこなう経済政策によって、経済構造が根本的に変化し、したがって階級関係が根本的にかわり、その結果、国家の政治的抑圧的機能が変化し、それにもなって、国家の政治形態が変化するとき、はじめて国家の階級の性格が変わったということができるのである。

1902年にはじまり1906年に頂点にたった第1次革命期の農民運動は、半農奴制的支配を根底から動揺させ、農業問題の解決が焦眉の課題となった。雇役制度の基盤であった共同体は、「所有権にたいする軽視、地主的土地所有への公然たる挑戦の場」としてとらえなおされた。土地貴族を中心とする支配階級は、革命の嵐のなかで農民の素朴さと共同体の防衛的性格の幻想をはっきりと断ちぎった。共同体はいまや恐怖すべき悪、「社会主義のバイラス培養基」にかわった。社会主義との戦いで支配階級の唯一の味方となるものは、「農民＝所有者」であり、その人工的創出であった。かくてツァーリズムの課題は、小土地所有者たる農民を、地主の損害をできるだけ少なくしてうみだすことであった。⁽¹⁸⁾1906年11月9日に発表されたストルィピンの土地改革法は、ツァーリズムの農業政策をかかえる方向に転換させるものであった。すなわち、それは、農民に共同体から離脱する自由をあたえることによって、富農が貧農の土地を買い占めて自由に発展することを保障していたが、地主的土地所有には一指もふれていなかった。従来、ヴィッテらによって唱えられていた、地主所有地の有償解放によって所有権を設定し、土地所有農民を創出しようとする土地改革案は、革命が退潮期に入るとともに一蹴されてしまった。

ストルィピンの土地改革法が、第2国会に提出されると、急速にボルシェヴィキの影響下に移りつつあった農民議員は、地主所有地の無償没収のスローガンをかかげてこれに反対した。農民議員の進出は、ストルィピンに、彼の農業法のうえにたつて農民との妥協を期待する根拠のないことを示した。

第2国会は、ツァーリズムの期待にそわなかった。かくて1907年6月2日、ツァーリ政府は、社会民主党議員の大部分を逮捕し、翌3日、国会を解散して新選挙法を發布した。6・3クーデターの結果、第3国会では、いわゆる6月3日連合が形成された。彼ら地主＝ブルジョア連合は、ストリピン⁽¹⁹⁾の土地改革法を承認したばかりでなく、1910年6月14日の法律をもこれに追加した。この法律は、最近24年間に割替えをおこなっていない共同体の全農民を、強制的法規で個人所有者として確認するものであった。要するに、ストリピンの農業改革は、農民を共同体から解放してその分解を促進し、富農の土地所有を發展させて貴族の大土地所有の藩屏とし、それによって土地貴族の利益と権力を擁護し、貧農を農業プロレタリア化して地主経営に十分な労働力を確保し、地主経営を雇役経営から徐々に資本家的経営に転換させることを目的としていた。それはまさに「資本主義のための第2の地主的『土地清掃』である。」⁽²⁰⁾そして、改革の全過程をつらぬく基本的モチーフは、「地主経営、地主的な所得、地主的（債務奴隸的）搾取方法を最大限に維持すること」⁽²¹⁾であったが、プロイセン型の道の限界もやはりそこにあったのである。

6月3日の新選挙法は、地主の1票は第1市民の43票、第2市民の65票、農民の260票、労働者の543票に相当するという、驚くべき不平等選挙であった。しかも、2段階間接選挙制は、労働者は3段階、農民は4段階へとさらに改悪された。この選挙制度の改正が、労働者・農民だけでなく、大ブルジョアの属する第1市民層、小ブルジョア・都市インテリゲンツィアの属する第2市民層にまでおしひろげられたことは、十分注目に値する。「1907年6月3日の選挙法は、農奴主的地主とブルジョアジーの上層とのブロックのうえに国家的な統治制度——単に統治だけではないが——を『打ち建てた』。そのさいこのブロックのなかでは前者の社会的要素が非常な優位を占め、両要素のうえには事実上すこしも切りちぢめられなかった旧権力が座を占めていた。」⁽²²⁾第1国会と第2国会では、ツァーリ専制は、まだ地主・ブルジョアジーとの協定のための道を手さぐりしていたが、第3国会では長期にわたる

協定を実現していた。また、第3国会は、現在支配している諸階級と国家権力との諸関係をより正しく表現していた。²²⁾「第3国会は、地主の政治組織と大ブルジョア階級の政治組織との、政治的にはっきりした形をとった全国的な同盟である。ツァーリズムは、これら2つの階級の組織の助けをかりて客観的＝必然的な歴史的任務を解決しようと試みている。²³⁾」

かくて6月3日のクーデターは、「革命の歴史の転換点であり、革命の発展のある特殊な時期またはジグザグのはじまりであった。²⁴⁾」大衆の直接的な革命闘争の時期はおわり、立憲君主主義への転換の時期がはじまった。かつては空約束にすぎなかった「立憲君主主義的転換」は、いまでは事実となり、ツァーリズムは新しい段階にはいった。²⁵⁾この段階のツァーリズムの特徴を、レーニンはつぎのように書いている。

「農奴的な旧専制は、絶対主義をえせ立憲的な形態でつつんだブルジョア君主制に転化しながら、発展している。ツァーリズムと黒百人組的地主および上層の商工業ブルジョア階級との同盟は、6月3日のクーデターと第3国会の開設によって、公然と認証され、承認された。必要にせまられてロシアの資本主義的発展の道に最後のにたち、このような道——それは農奴的な地主に、その権力と所得を確保するであろう——をまもりぬこうと努力しながら、専制は、この階級と資本の代表者とのあいだをぬってたくみに進んでいる。²⁶⁾」「こんにちのツァーリズムの農業政策の特色は、同じようなブルジョア的＝ボナパルチズム的性格をおびていることである。……ツァーリズムは、農村を略奪しつくすことを富農にまかせて、富農との同盟をもとめている。専制は、共同体的＝分与地的土地所有全体をできるだけ急速に破壊し、もっぱら私的土地所有を強化するのに、夢中になっている。²⁷⁾」「ストルィピンの『憲法』とストルィピンの農業政策は、古い半家父長制的、半農奴制的ツァーリズムが解体していくうえでの新しい段階、それがブルジョア君主制に転化していく途上の新しい一步をあらわしている。……現在の情勢の特異な点は、専制がブルジョア階級の一定の層のために代議機関を創設しなければな

らず、ブルジョアジーの一定の層と農奴主たちとのあいだで綱わたりをやり、国会内にこれらの諸層の同盟を組織しなければならず、百姓の家父長気質に希望をかけることをいっさいやめて、農村の大衆に対抗して、共同体を零落させている富農に支柱をもとめなければならなかったという点にある。」

ツァーリ専制が、6月3日体制、すなわち地主＝ブルジョア的国会の支持を必要としたのは、たんに立憲主義的幻想をふりまくためではなかった。ツァーリズムは、ブルジョア・ヨーロッパの代議制のために、ヨーロッパの銀行家から借款をうけるために、議会的な装いを必要としていた。ツァーリ政府の強固さとその支払能力にたいするヨーロッパ資本の信用は、国会の直接または間接の同意にいちじるしく依存していた。ロシアの「専制がどんなにアジア的に野蛮であろうとも、……やはり専制政府は、幾千の断ちがたい糸でヨーロッパや、国際市場や、国際資本と結びついた資本主義国の政府である。全ロシアのブルジョアジーにたいする専制の依存は、きわめて強力な物質的依存である。」⁸⁹だから、法律上、国会の予算承認権がいかに小さくとも、事実上は、政府は国会の承認に依存せざるをえない。ところが、国会への依存は不可避免的に、「国家権力に資本が影響をおよぼす独特な諸形態」⁹⁰を生みだす。かくてツァーリの権力は、従来どおりに完全に無制限な専制ではなくなり、たとえわずかにせよ、ブルジョアジーから制限をうけるようになる。レーニンは、この無制限な専制から「制限された専制」への変化、「専制とブルジョアジーとの同盟」という事実のなかに、社会民主党の独特な戦術の基礎を見出し、「専制をたおせ」というスローガンにかわって、「君主制をたおせ」というスローガンを、人気のある「人民の合言葉」にしなければならぬと強調した。⁹¹そして、このようなツァーリズムを、「半ブルジョア的ツァーリズム」⁹²とよんだのである。

だが、専制がブルジョアジーと同盟し彼らに依存していることは、専制が全権力を保持していることを否定するものではない。「ロシアの旧権力は『ブルジョア君主制への転化の道をさらに一步すすみ』、しかも『ほかならぬ封

建型の地主に彼らの権力と所得を確保するような』、まさにそのような資本主義的發展の道を固執している⁶³、『『真の憲法』がないことや、専制が全権力を保持していることは、この権力が、国民的な規模で、国家的意義をもつ公然と活動する諸機関内で、一定の諸階級の反革命的同盟を組織せざるをえないような、また一定の諸階級自身が、ツァーリズムに手を差しのべる反革命的ブロックに下からみずからを組織していくような、独特な歴史的情勢をすこしも排除するものではない。』⁶⁴「排他的に農奴制的な性質を失いながら、ブルジョア君主制にむかって前進しつつある農奴制的支配体制を、『大資本の代表者の完全な支配』と混同することは、まったくゆるしがたいことである。』⁶⁵第3国会後の専制の支配体制の特質は、つぎの点にあった。「すなわち、命令し、決定し、決裁するのは、地主である。この階級の無制限の権力は巨大なものである。地主階級は、ブルジョアジーにたいして……契約の締結を『ゆるす』だけで、しかもこの契約を破棄してしまうのである。だが、それだけではない。支配階級の範囲内でも、協定は異常な、超自然的な手軽さで『破棄』されている。』⁶⁶つまり、国家権力は、地主階級一般ではなく、農奴主の大地主＝黒百人組の貴族の手中にあり、彼らは、専制の支配体制に新しい強固な土台をすえるため、ユンカー型に資本主義を發展させようとしていた。そして、ツァーリ専制は、全権力を保持しながら、地主とブルジョアジーのブロックの利益を実現していたのである。ブルジョアジーは、権力を掌握することはできなかったが、経済的に成長して全国的規模で階級に組織されており、そしていまや、専制の権力行使を制限し、その政策に影響をあたえつつあった。このように、ブルジョアジーが、「契約を締結する者」、「権力を分かちあう者」⁶⁷となったことは、国家権力の階級的性格の変化を意味していた。「ロシアの国家権力の階級的性格は、1905年以後重大な変化をこうむった。それは、ブルジョア的方向への変化である。……しかし、この新しい道でもう一步前進したものの、権力はあいかわらず旧来のままであって、政治的諸矛盾の総体はこのために増大している。』⁶⁸6月3日体制は、革

命的危機の根因をとりぞかなかつたばかりでなく、「特殊な政治的危機」の原因をもとりぞかなかつた。すなわち、国家権力と支配体制との矛盾、「権力をもつ者」と「権力を分かちあう者」との矛盾は、立憲的危機を惹起し、そのため、ブルジョアジーは、たえず自由主義的改革を要求し、専制の権力を削りとりとうとするのである。

ストルィピンの土地改革法は、はっきりしたブルジョアの性格をおびており、専制の農業政策の原則的転換をしめすものであったが、「しかし、この原則的転換が、すでに問題を解決したとか、すでに資本主義的農民経済の新しい地盤を生みだしたとか、すでに古い問題を取りのぞいたなどとは、きょうまで、どんなに無原則的な、風向きしだいでどうにでもなる人間、たとえばカデットでさえ、あえて断言しなかつた。」⁸⁹ ストルィピンの土地改革は、雇役にもとづく地主経営をユンカー的経営に転換することはできなかった。しかし、富農による共同体の蚕食は、いちじるしくすすんだ。1906年から15年までに200万以上の農家が共同体を離脱し、16年までには共同体の約40パーセントが分解してしまったといわれている。農民大衆は、富農の略奪によって土地を喪失し、急速に零落した。ストルィピンの改革は、それが成功すればするほど、農村における階級対立を激化させるという矛盾をもっていた。「ストルィピンの『改革』を6年間も経験し、『私有権を確立した土地』の数が6年間も『かがやかしく』増大し等々したあとの現在では、この改革が危機をとりぞかなかつたこと、またとりぞきえないことには、すこしの疑いもありえない。」⁹⁰ 「現在のロシアの農村の諸矛盾の総和は、つぎのことに帰着する。すなわち、古い農奴主が、その土地と権力を完全に保持しながら、ブルジョアの農業政策を遂行するということである。」⁹¹ かくて1912年から、革命運動の再昂揚がはじまるとともに、農民の闘争も活発になり、ストルィピンの農業政策は破綻するにいたった。

たしかに、ツァーリズムは、1907～08年に、ブルジョア君主制への転化にむかって一步前進した。その意味で、ロシアの1907～08年はドイツの1866～

70年に、第3国会の土地改革法は「憲法争議」に相当していた。だが、つぎの点で根本的に異なっていた。ビスマルクの帝国統一は、ブルジョア革命の客観的諸課題（＝資本主義の国民的な道の最後の確立）を完全に解決したが、ストルィピンの農業政策は、それを解決しなかったことである。「ドイツのブルジョア民主主義革命以後にすぎさった30年の歳月は、この革命の客観的に必要な諸任務を完全にはたした。……ロシアでは、ブルジョア民主主義革命の最初の大勝利と最初の大敗北ののちに、まだ過ぎざりきらない3年の歳月は、この革命の任務をはたさなかったばかりでなく、むしろこの任務を、プロレタリアートと農民の広範な大衆にはじめて意識させた。」⁴²「われわれは『ドイツの軌道』の可能性をみとめなければならないが、それがいまのところないことをわすれてはならない。」⁴³したがって、プロレタリアートと農民の歴史的課題は、依然としてブルジョア民主主義革命にあったのである。

以上のように、ロシアでは、絶対主義からボナパルティズムへの移行は、ドイツと違って現実的基礎を欠いていたのである。それは、政治形態としては成立せず、階級闘争の激化せる一定の期間、政府の政策、なかんずく農業政策におけるボナパルティズムへの模倣・類似性としてしか成立しえなかった。ストルィピンの農業政策が、「農業ボナパルチズム」とよばれるのもそのためである。ストルィピンの農業政策は、農民闘争の激化のため、わずか数年間で破綻したが、それには、より本質的な理由がみとめられる。すなわち、ロシアの資本主義が、1900～03年の恐慌を転期として、急速に独占資本主義に移行していったことである。

一般に、後進資本主義国では、国家権力が帝国主義成立の過程で先導的役割をはたして、国家資本がそれ自体巨大な独占を形成し、特権資本の前期的独占がそのまま近代的独占に転化する。このいわゆる早期独占は、たんに蓄積過程の矛盾によるだけでなく、世界市場における資本の競争力の脆弱さを補うためにも、その形成が促進される。絶対主義の対外政策は、個々の資本が国外市場への要求を現実化し、それを政策要求として提出する以前に、権

力が資本の将来あるべき政策を予想する、という顛倒的現象さえしめす。それは、まさにヴィッテがいうように、国際競争はまってくれないからである。このような国際的契機にみちびかれた帝国主義的対外政策を、その資本的基礎の欠如と解してはならない。帝国主義の経済的基礎である独占が成熟するとともに、帝国主義的政策はより体系的・統一的となり、政府にたいするブルジョアジーの政策要求もより具体的・組織的となるのである。かかる意味におけるロシア帝国主義の成立は、1900～03年の恐慌にもとめられるのである。

帝国主義の時代には、ツァーリズムの対外政策は、ブルジョアジーの利益を代表することなしには実行不可能になる。かくてツァーリズムは、農奴主的地主の利益をまもりながら、反動の主要な砦として、列強の植民地獲得競争のなかでロシア帝国主義の優位さを確保するため、資本にたいし積極的な提携をもとめざるをえなかった。しかし、ツァーリズムは、ブルジョアジーの自主的な階級組織なしには、彼らの利益を代表できない。だから、ツァーリズムは、全国的規模で組織されたブルジョアジーとの同盟を必要としていた。他方、ブルジョアジーは、国内の政情不安をおかしてまでも自己の完全な政治的支配を実現することを断念し、もっぱら専制官僚との直接取引によって独占利潤を追求していった。彼らは、すでに独占資本家にまで成長し、国外市場への進出、植民地の獲得を要求するにいたっていたが、それは、ツァーリの権力の助けをかりてのみ実現可能であった。ここに、ツァーリを先頭とする農奴主的地主と上層ブルジョアジーとの同盟が、第3国会で形成される現実的基盤があった。そして、第4国会(1912～17年)では、「地主階級と商工ブルジョアジーの上層とは、ツァーリ政府の好戦的政策を熱心に支持した。」⁴⁵

ツァーリ政府の新しい農業政策は、長期にわたり国内の階級闘争を激化させるという矛盾をもっていたので、ロシアが近東・極東の分割戦に積極的に参加するようになると、途中で放棄せざるをえなくなった。ボナパルティズ

ム的農業政策は、ロシアを大工業国に転化して、列強の植民地争奪戦に伍していくためにとられた政策であったが、帝国主義的対立の激化は、ロシアにそのような余裕をあたえなかった。帝国主義の時代には、上からのブルジョア革命の可能性は、なお抽象的には存在していたとはいえ、現実¹にそれが完遂されるための条件は、国内的にも国際的にも、すでに失われていたのである。

〔補註〕

ブルジョアの農業進化の2つの道の理論は、「この問題の現実性を証明した1905～1907年の闘争によって、提起されたものである。」そして、「ブルジョア革命の完成の2つの方式」を可能にしている客観的・経済的な諸条件を明らかにし、「この革命の完全な勝利が、プロレタリアートと農民の独裁としてのみ可能である」というボルシェヴィキの戦術の経済的基礎づけをおこなうためのものであった。²レーニン³は、ブルジョアジーが反動化し、階級意識あるプロレタリアートが形成された帝国主義の時代に、マルクス・エンゲルスの提起した永続革命論を発展させて、ブルジョア民主主義革命におけるプロレタリアートのヘゲモニー、労働者と農民の革命的独裁、民主主義革命の社会主義革命への成長転化の理論として定式化した。ボルシェヴィキ内部で、農業問題をめぐる意見の相違が消滅したのは、このようなレーニンの革命理論が指導方針として確立してからのことであった。したがって、レーニンの2つの道の理論は、ブルジョア革命論、ならびに、それが提起された基礎である帝国主義の理論と結びつけてのみ、正しく理解することができる。『農業綱領』は、『二つの戦術』ならびに『帝国主義論』との関連で理解されなければならないのである。この関連を忘れて、2つの道の理論を、たんにブルジョアの発展の2つの型があるかどうかといった問題に歪小化するならば、それは完全に、客観主義＝経済主義に墮するものである。

したがって、1914年、最初の帝国主義世界戦争がはじまり、ロシアがこれに参加したのちには、もはや「えせ立憲主義」、「ボナパルティズムの道にそっての絶対君主制の発展」といった規定では、ロシアの国家権力の性格、ならびに、国家権力と支配階級の相互関係を、正しく表現することはできない。かくてレーニンは、ツァーリズムに「軍事的・封建的帝国主義」という新たな規定をあたえ、ツァーリズムの専制と金融資本の独占との融合を指摘した

のである。

「ロシアでは、ペルシア、満洲、蒙古にたいするツァーリズムの政策に、最新型の資本主義的帝国主義が完全に現れたが、しかし全体として、ロシアでは軍事的・封建的帝国主義が優勢である。⁴⁹」
 「日本とロシアでは、軍事力の独占や、広大な領土の独占、あるいは異民族、中国その他を略奪する特別の便宜の独占が、現代の最新の金融資本の独占を、一部はおぎない、一部は代位している。⁴⁹」
 だが、プロレタリアートは、社会主義革命のために、まずもって、ロシア帝国主義の権力の外被であるツァーリズムを打破しなければならない。「プロレタリアートは、権力獲得のため、共和制のため、土地没収のため、すなわち、農民をひきつけるため、農民の革命的な力を汲みつくすため、軍事的＝封建的『帝国主義』（＝ツァーリズム）からブルジョアのロシアを解放することに『非プロレタリア人民大衆』を参加させるために、現にたたかっているし、将来も献身的にたたかうであろう。そして、プロレタリアートは、ブルジョアのロシアをツァーリズムから、地主の土地と権力からこのように解放することをただちに利用するが、それは、富農が農村労働者とたたかうのをたすけるためではなく、ヨーロッパのプロレタリアートと同盟して社会主義革命を遂行するためである。⁴⁹」
 「帝国主義戦争は、ロシアにおける革命的危機、ブルジョア民主主義革命を基盤とする危機と、西欧におけるプロレタリア社会主義革命の危機の増大とを結びつけた。……ロシアにおけるブルジョア民主主義革命は、いまではもう、西欧の社会主義革命の序曲であるだけでなく、切りはなすことのできない構成部分なのである。⁵⁰」

ツァーリ政府が帝国主義戦争に参加したのは、「ロマノフ家の君主制の没落をおくらせ、ロシアにおける新しい革命を阻止できるものがまだなにかあるとすれば、それはただ、対外戦争がツァーリの勝利におわることだけだということ、非常によく理解している⁵⁰」からであった。しかし、ツァーリ軍隊のあいつぐ敗北と経済的破綻は、かえって革命の炎を一段ともえあがらせた。そのため、情勢は若干変化した。「君主制と農奴主的地主の立場は、わ

れわれの目には明白である。すなわち、ロシアを自由主義的ブルジョアジーに『ひきわたさない』こと、むしろ、ドイツの君主制と取引することである。同様に、自由主義的ブルジョアジーの立場も明白である。すなわち、敗戦と高まる革命とに乗じて、狼狽した君主制の譲歩をかちとり、ブルジョアジーとの権力の分けあいをかちとることである。⁵⁰」しかし、戦争継続か、ドイツとの講和か、をめぐる2つの政治勢力のあいだの矛盾は、基本的なものではなく、情勢の急転回によってよびおこされた一時的・副次的な矛盾にすぎなかった。両者のあいだには、戦争目的についてなんらの相違もなかった。ただ、「もっばらいつ、どのようにして、ドイツにたいする闘争からイギリスにたいする闘争に方向を転換するかをめぐって、論争がおこなわれているにすぎない。」⁵¹ 論争問題の解決は、軍事上および外交上の考慮にかかっていた。

大衆の革命的昂揚を前にして、ブルジョアジーにとって主要なことは、君主制のもっとも重要な機関、とくに警察・官僚・常備軍を維持することであった。だから、彼らは、旧国家機構の全機関をできるだけ改革しないで、ニコライ二世を退位させ、未成年の皇太子アレクセイを帝位につけ、ミハイル・ロマノフを摂政に任命しようと画策していた。そして、これには、イギリスとフランスの資本の支持があった。ブルジョアジーは、革命的大衆の蜂起が開始される最後の瞬間まで、ツァーリ君主制を救うことを期待していたし、革命の勝利後も、君主制を復活させるために画策していた。だから、1917年3月2日、ニコライ二世が退位の宣言に署名してツァーリズムが崩壊したのは、ブルジョアジーの力によるものではなく、革命的プロレタリアートと人民の力によるものであった。しかし、2月革命後に成立したのは、労働者と農民の政府ではなく、ケレンスキーの反革命政府であった。「これは、ロシアで政治権力に到達した新しい階級、資本主義的地主とブルジョアジーの階級の代表者である。」⁵²「ロシアの国家権力は新しい階級の手⁵³に、すなわち、ブルジョアジーとブルジョア化した地主との手⁵⁴にうつった。そのかぎり⁵⁵で、ロシアにおけるブルジョア民主主義革命は終了した。」

ケレンスキー内閣は、ロシアにおけるボナパルティズムの始まりを意味していた。しかし、その社会的基盤は、きわめて脆弱であった。「ケレンスキー内閣は、疑いもなく、ボナパルティズムの第一歩である。実際、ここにはボナパルティズムの基本的な歴史的標識がある。すなわち、軍閥（軍隊の最悪の分子）に依拠する国家権力が、多少とも均衡をたもっている2つの敵対的な階級や勢力のあいだで掛引きしているということが、それである。⁵⁰」
「ロシアでは、ボナパルティズムは偶然のものではなく、かなり発展した資本主義が存在し、革命的プロレタリアートがいる小ブルジョア国における階級闘争の発展の自然の産物である。……けれども、ボナパルティズムが不可避だということをもとめることは、ボナパルティズムの崩壊が不可避だということをおぼろげにするだけではいけない。……1917年のロシアのボナパルティズムは、1799年と1849年のフランスにおけるボナパルティズムの始まりとは、いくつかの条件で区別される。たとえば、革命の根本的な任務が一つも解決されていないことが、それである。⁵⁰」ケレンスキー内閣は、「農奴制的ツァーリズムの物質的基礎である地主的土地所有に手をつけていない。⁵⁰」農民の土地と自由への要求は満たされなかった。ここに、ボナパルティズムの崩壊が不可避だという理由があった。帝国主義段階に成立したボナパルティズムに、地主的土地所有の一掃を期待することはできない。それは、10月革命によって、はじめて解決可能となるのである。

1917年のロシア革命の歴史は、帝国主義の時代において、ブルジョア革命の客観的課題は、「上からの革命」によっても、またブルジョアジーの独裁のもとでも完遂されえない、それは、プロレタリアートと農民の独裁によってのみ完成される、そして、ブルジョア民主主義革命は急速に社会主義革命に成長転化する、というレーニンの理論の正しさを証明した。われわれは、かかる脈絡のなかでのみ、軍事的・封建的帝国主義の概念を正しく把握することができる。すなわち、軍事的・封建的帝国主義とは、世界史の帝国主義時代における、後進国絶対主義の「上からのブルジョア革命」の挫折・壊滅

の形態であり、絶対主義権力のもとに踞せる資本主義的帝国主義、いいかえるならば、資本主義的帝国主義の権力としての役割を機能的に代行しているところの絶対主義である。

たしかに、ツァーリズムは軍事的・封建的帝国主義であり、近代の資本主義的帝国主義と近代以前の封建的帝国主義とは概念的に区別される。しかし、それは、歴史的概念として区別されるということであって、ひとつの国、ひとつの社会構成体に、「2つの帝国主義が同時に存在する⁶⁹」とか、各段階によって新旧2つの帝国主義の組合せや比重が異なるとか、いうことを意味するものではない。あるのは、ただひとつの帝国主義、すなわち、ロシアの(あるいは日本の)帝国主義であり、問題は、そのひとつの帝国主義の歴史的・階級的な性格である。したがって、神山茂夫氏の軍・封・帝国主義論、2重の帝国主義論は、明らかに理論的誤謬である。また、軍事的・封建的帝国主義という概念は、もともと、ロシア帝国主義の歴史的・階級的な性格、とくに、ツァーリズムの世界政治における役割、国家権力と支配階級との現実的な相互関係を、適確に表現するための規定であった。したがって、それは、たんにおくれた、軍事的かつ封建的性格を色濃く残した資本主義的帝国主義の一変種でもなければ、「絶対主義的君主制の対外侵略性」⁷⁰、「権力機構としての特質⁷¹」に解消されうる問題でもない。

〔補註〕

平野義太郎氏は、神山氏の2重帝国主義論を批判して、「……権力の階級的基礎とその権力の武器たる国家機関の組織された機構とがゴッチャにされている。軍・封・帝国主義は国家権力の上部構造であり、それが最新型の帝国主義(権力の階級的基礎たる金融資本の権力)をつよめ、鞏固化し、近代帝国主義のもつ、もっとも軍国主義的な面を自乗しているのである⁷²」と書いている。「国家権力の上部構造」、「権力の階級的基礎たる金融資本の権力」というのは、明らかに概念の混乱であり、階級的基礎が金融資本ならば、それは、軍・封・帝国主義ではなく、近代帝国主義である。このことは一応おくとしても、平野氏もまた、帝国主義・上部構造(国家機構)・階級的基礎の3つをゴッチャにしているのであり、基本的には、やはり2重帝国主義論である。両者の違いは、2つの帝国主義を「区

別」するか、「自乗」するかの違いにすぎない。軍・封・帝国主義＝上部構造、近代帝国主義＝階級の基礎として、両者を分離するならば、平野氏が強調する2つの帝国主義の結合は、一体どこで立証されるのであろうか？

この点で、経済構造の面から、2つの帝国主義の相互作用を明らかにしようとした小山弘健氏の見解は注目される。⁶²小山氏は、2重の帝国主義を「より正確には帝国主義の2重性」と規定しているが、それでもなお、「事実において日本やロシアで、近代的帝国主義の成立以前に軍・封・帝国主義が存在したこと、その後軍・封・帝国主義と近代的帝国主義との2重の性質をもつにいたったこと、は否定しえない」とされた点には、同意することができない。

一般に、帝国主義とは、たんに経済構造あるいは上部構造をさすものではなく、その両者を包含する全社会構成にかんする概念である。レーニンが『帝国主義論』であたえた方法上の重要性は、すべての帝国主義（植民政策あるいは対外侵略主義）は、たとえ外見上類似した現象であっても、それは「経済的社会構成体の根本的差異」（『全集』第22巻、300ページ）にもとづく独自の運動法則の所産である、ということであった。すなわち、帝国主義の性格は、一般的にはその経済構造の性格によって、より直接的には国家権力の性格によって決定される、ということであった。とするならば、日本やロシアのように、ブルジョア革命の客観的課題が解決されず、経済構造のなかに資本主義的生産関係と封建的生産関係が並存しており、そのうえに絶対主義権力が存立している国では、そこに成立する帝国主義の歴史的・具体的性格は、それがいかに金融資本の侵略欲を包含していようと、近代的ではなくて、軍事的・封建的なのではないだろうか。

レーニンが「単独講和について」のなかで指摘しているように、戦争前ならびに戦争中のツァーリズムの対外政策のなかには、「狭い君主主義的な見地」（絶対主義独自の利害）ばかりでなく、「一般の帝国主義的な見地」（金融資本の利害）も、同時につらぬかれていた。⁶³一般に、後進絶対主義国では、資本主義の発展が絶対主義の固有の基礎である半封建的土地所有をほりくずすため、絶対主義権力は自己の基礎の維持・拡大のため、たえず対外侵略への衝動をうける。そして、対外侵略が成功すれば、それは、絶対主義の基礎の拡大をもたらすだけでなく、資本の国外への発展をも可能にし、半封建的農業と資本主義的工業の同時的存在という根本的矛盾の激化を一時弱める。その

かざりて、絶対主義は資本の発展を補足し、資本は絶対主義を支持する。ここに、資本の膨脹欲と絶対主義の侵略欲との相互規定的な関係が生ずるのである。20世紀のロシアにおいて、絶対主義的帝国主義と資本主義的帝国主義との概念上区別される2つの帝国主義は、互いに分離して存在するのではなく、ひとつのロシア帝国主義に結合され、それに2重の性格をあたえていたのである。このロシア帝国主義の権力機構がツァーリズムであり、金融資本の独占(近代帝国主義)は、この権力的外被のなかにつつまれていたのである。かかる意味で、「ツァーリズムは、帝国主義のもっとも否定的な面を自乗したものの中心であった。」⁶⁵そして、ツァーリズムの性格がロシア帝国主義の性格を決定し、軍事的・封建的帝国主義としていたのである。だから、軍事的・封建的帝国主義＝ツァーリズムというのは、正確には、軍事的・封建的帝国主義の権力がツァーリズムである、との意味に解しなければならない。そうでなければ、国家機構と帝国主義がゴツァにされ、国家権力のもっている相対的独自性が見失われてしまうのである。

ツァーリズム(同様に日本の天皇制)は、ブルジョアの勢力の台頭によってそれと対抗しあう古典的絶対主義とは違って、むしろ資本主義の形成・発展を先導し補充することによってそれに適応していく、歴史的に特殊な絶対主義権力である。だから、独占資本の利益は、ツァーリズムによって部分的に代位され補充されていた。もちろん、独占資本はツァーリズムとは異なった自己独自の利害をもっているので、たとえツァーリズムによって代位・補充されており、その権力的外被のもとにおおわれていても、たえず独自に直接に對外膨脹を遂行しようとする。しかし、そのための手段は、結局ツァーリズムの権力にもとめなければならなかった。レーニンが「ロシアでは、資本主義的帝国主義は比較的弱いが、そのかわり軍事的＝封建的帝国主義がより強力である」⁶⁶として、両者を対比しながら説明しているのも、この独占資本の独自の對外膨脹欲を指摘しているのも、2つの帝国主義の同時的存在を意味するものではない。レーニンは、軍事的・封建的帝国主義という規定

を、帝国主義段階のツァーリズム、近代帝国主義権力の機能を代行しているツァーリ君主制にあてはめて論じているのであって、それを帝国主義段階以前のツァーリズムの対外軍事侵略にまで無原則的に拡大するのは、レーニンの定式化の意義を失わせるものである。戦争中、ツァーリ政府によって創設された国家機関のなかに、独占資本の有力な代表者がくわわっていたが、そのことは、ロシア帝国主義の軍事的・封建的性格を否定するものではなく、むしろその内容である。

このように、資本主義的帝国主義の権力を機能的に代行していく特殊な歴史的役割と、それを可能にする内外諸条件の特別の有利さとの結合が、ツァーリ絶対主義をして帝国主義段階にまで存立させえた根本条件だとすれば、この場合、絶対主義が独占資本の発展と補充に一度でも失敗すれば、その存立に致命的打撃をうけ、ひいては資本主義の構造と方向をもかえてしまうことは、自明であった。これは、ツァーリズムの矛盾であると同時に、ロシア帝国主義の矛盾でもあった。しかし、大戦の軍事的敗北によってツァーリズムが崩壊し、「軍事的—絶対主義的—封建的帝国主義が急速に一掃されても、……それによって、ブルジョア的な帝国主義は、消えてなくなるどころか、かえってつよまる⁶⁷だけ」である。ツァーリズムの軍事的・封建的帝国主義にかわって、外被をぬぎすてた近代的帝国主義が、赤裸々な形であらわれてくるのである。

以上、ロシア帝国主義(同様に日本帝国主義)を分析する場合、もちろん、その超反動性の根源を絶対主義権力にもとめることから出発しなければならないが、むしろ問題は、経済構造における資本主義と半封建的農業との相互関連と両者の本質的矛盾、その上部構造への対応関係を、歴史的・具体的に解明していくことにある。したがって、資本主義発展と上部構造とのあいだの相互補充と反撥の関係、資本主義発展と絶対主義の階級的基礎の変化の関連、国家権力の階級的性格と政府の基本政策とのあいだの矛盾などが、分析の中心にすえられなければならないのである。

- 註 (1) 増田富寿『ロシア農村社会の近代化過程』御茶の水書房、1958年、第1篇「1861年の農奴解放」参照。
- (2)(4) レーニン『『農民改革』とプロレタリア＝農民革命』『全集』第17巻、111、116ページ、傍点原文。
- (3) 「1905～1907年の第1次ロシア革命における社会民主党の農業綱領」『全集』第13巻、274ページ。
- (5)(7)(8) エンゲルス『『ロシアの社会状態』のあとがき』『全集』第18巻、683、683～4、689ページ。
- (6) 「『人民の友』とはなにか』『全集』第1巻、283ページ。
- (9) 日南田静真「ロシア農業における雇役制度の成立と展開」『歴史学研究』別冊特集、1961年10月、参照。
- (10) 和田春樹「エス・ユ・ヴィッテ」『歴史学研究』第253号、1961年5月、33ページ、所収。
- (11) 菊地昌典「ロシア帝国主義と支配階級の性格」『歴史学研究』第264号、1962年4・5月、121ページ、所収。
- (12) 「君主主義的ブルジョアジーのうしろにつくか、革命的プロレタリアートと農民の先頭に立つか？」『全集』第9巻、218ページ。
- (13) 「政治的グループ分けの最初の決算」『全集』第9巻、424ページ。
- (14) 「革命のお役所仕事と革命的事業」『全集』第10巻、50ページ。
- (15) 「ロシア社会民主労働党統一大会に提出すべき戦術綱領」『全集』第10巻、143ページ。
- (16) 「ロシア革命とプロレタリアートの任務」『全集』第10巻、125ページ。
- (17) 「カデットの勝利と労働者党の任務」『全集』第10巻、219ページ。
- (18) 菊地昌典、前掲論文、120ページ。レーニン「政府の政策ときたるべき闘争」『全集』第11巻、177ページ。
- (19)(20) 「1905～1907年の第1次ロシア革命における社会民主党の農業綱領」『全集』第13巻、235、274ページ。
- (21) 「選挙の総括」『全集』第18巻、526ページ、傍点原文。
- (22) 「ボルシェヴィズムの戯画」『全集』第15巻、376ページ。
- (23) 「ブルジョアジーの『左翼化』とプロレタリアートの任務」『全集』第15巻、388ページ、傍点原文。
- (24) 「正しい道へ」『全集』第15巻、3ページ。
- (25) 「ボイコットに反対する」『全集』第13巻、20ページ。
- (26)(27) 「ロシア社会民主労働党第5回(全国)協議会」『全集』第15巻、309、309

- ～10ページ。
- (28) 「大道へ」『全集』第15巻, 335～6ページ。
- (29) 「政治的グループ分けの最初の決算」『全集』第9巻, 423ページ。
- (30) 「資本主義と『議会』」『全集』第18巻, 130ページ。
- (31) 「ロシア自由主義派の最新の言葉」『全集』第16巻, 144～5ページ。「ロシアの政党を分類する試み」『全集』第11巻, 225ページ, 参照。
- (32) 「ブルジョアジーの『左翼化』とプロレタリアートの任務」『全集』第15巻, 338ページ。
- (33) 「権力の社会的構成, 見通しおよび解党主義について」『全集』第17巻, 146ページ, 傍点原文。
- (34) 「政論家の覚え書」『全集』第16巻, 212ページ。
- (35) 「大資本の諸組織にかんするアンケート」『全集』第18巻, 62ページ, 傍点原文。
- (36) 「政治的教訓」『全集』第20巻, 175ページ, 傍点原文。
- (37) 「プロレタリアートの戦術の当面の任務」『全集』第10巻, 494ページ。
- (38) 「大資本の諸組織にかんするアンケート」『全集』第18巻, 56ページ, 傍点原文。
- (39) 「権力の社会的構成, 見通しおよび解党主義について」『全集』第17巻, 139ページ, 傍点原文。
- (40)(41) 「最後の瓣」『全集』第18巻, 259ページ。
- (42) 「正しい道へ」『全集』第15巻, 7ページ, 傍点原文。
- (43) 「イ・イ・スタヴォルツォフ・ステパーノフへ」『全集』第34巻, 464ページ, 傍点原文。
- (44) 「現情勢の評価について」『全集』第15巻, 259ページ。
- (45)(47) 「社会主義と戦争」『全集』第21巻, 312, 325ページ。
- (46) 「現在の思想的混乱の若干の根元について」『全集』第16巻, 87～95ページ。
- (48) 「帝国主義と社会主義の分裂」『全集』第23巻, 123ページ。
- (49) 「革命の二つの方向について」『全集』第21巻, 433ページ, 傍点原文。
- (50)(52) 「ロシアの敗北と革命的危機」『全集』第21巻, 392～3, 393～4ページ, ゴシック・傍点原文。
- (51) 「社会主義と戦争」『全集』第21巻, 325ページ。
- (53) 「単独講和について」『全集』第23巻, 139ページ, 傍点原文。
- (54) 「遠方からの手紙」『全集』第23巻, 334ページ。
- (55) 「わが国の革命におけるプロレタリアートの任務」『全集』第24巻, 40ペー

- ジ、傍点原文。
- (56) 「ボナパルティズムの始まり」『全集』第25巻，242，243～4ページ。
- (58) 「わが国の革命におけるプロレタリアートの任務」『全集』第24巻，41ページ。
- (59) 神山茂夫『現代国家の史的究明』葦会，1953年，119ページ。
- (60) 神山茂夫『天皇制に関する理論的諸問題』（改訂増補新版）葦会，1953年，208ページ。
- (61) 平野義太郎『国家権力の構造』理論社，1954年，90ページ，傍点原文。
- (62) 拙稿「農商工高等会議について——日本帝国主義成立史上の一論点」『同朋学報』第12号，1965年6月，65～6ページ，参照。
- (63) 小山弘健『日本資本主義論争史』下，青木文庫，1953年，50ページ。
- (64) 『全集』第23巻，141ページ。
- (65) スターリン「レーニン主義の基礎について」邦訳大月書店版『全集』第6巻，89～90ページ。
- (66) 「第2インターナショナルの崩壊」『全集』第21巻，226ページ。
- (67) 「国際主義的言辞による社会排外主義的政策の擁護」『全集』第21巻，449ページ，傍点原文。